

人脈チートだけれども、
それに気が付かず、15
年間うだつの上がらな
い生活を送っている(主
観)やさぐれ転生者は今
日も美人局(笑)を躲し
て平穩^Eを(享^S)受する

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人脈チートで転生しても、疑心暗鬼と、こじらせがここまできると、こうなるって話。
下の小説と同じ世界観での話

<https://syosetu.org/novel/164024/>

<https://syosetu.org/novel/226378/>

世界観については以下に記載

<https://syosetu.org/novel/164024/1.htm>

目次

☆☆随時更新☆☆ 登場人物 カネツ
グ、ヒロイン勢、その他勢について

1

転生したけれども、レベルはあがらない
し、顔はブサイクだし、美人局と罫を避け
ながら今日も俺はうだつの上がない生
活を送る

18

なんか、最近いつも以上に色んな奴に絡
まれたりしてるが、それらすべてを避け
つつ、今日も俺は仕事にいそしむ

46

モンスター娘に求愛されたが、どうせ最

後は食料にされるだろうし、断りつつ、今
日の夕食を食べる俺

56

既成事実積み重ね系獣ロリVS、ストー
キングキャリアウーマン ふあいつ

67

地雷は積み重なり、連鎖するのさ

80

【幕間】彼ら、彼女たちから見た、カネ

ツグの評判とその1

91

女子からお金を借りるといふのは、男に
とって、これ以上なく情けなく感じるこ
とです()キニシナクテモイインデスヨ
?(ねつとり)

101

クール爆乳無表情ヤンデレメイド、シャ ロの一日くお前……お前……(畏怖)	112
いい夢を見ていました(震え声)く水面下 の競争く	122
とある一幕く彼がもし怪我をした場合く その1	133
寓話く元駆け出しだったAランクパ ー	140
ティーたちの話 その1	140
寓話く元駆け出しだったAランクパ ー	157
ティーたちの話 その2	157
寓話く元駆け出しだったAランクパ ー	165
ティーたちの話 その3	165

とある一幕く彼がもし怪我をした場合く その2	178
寓話く元駆け出しだったAランクパ ー	186
ティーたちの話 その4	186
寓話く元駆け出しだったAランクパ ー	196
ティーたちの話 その5	196
寓話く元駆け出しだったAランクパ ー	204
ティーたちの話 その6	204
く酔っぱらったところをほいほい食われ た場合く その1	214
フィーネの場合	214

☆☆随時更新☆☆ 登場人物 カネツグ、ヒロイン勢、その他勢について

カネツグ

転生して、初めて冒険者として組んだパーティーに金と装備をだまし取られ無一文に。

二度、あることは三度あつた結果、彼は完全に人間不信+やさぐれに。元々は明るい性格の今時の青年だったが、

ヤンキーっぽい生き方が結局得をする悟り、オラオラ系にチェンジ。

朱元璋もびつくりの猜疑心と、童帝も冷や汗のひがみつぶりにて、

地雷を回避し続けている。

良縁を結ばれるチートによって多くの女子、女性と知り合いに。

その結果、彼をめぐって水面下の戦争が行われているほど。

しかし、彼自身はそれから目をそらし続けているため、

どうにか表立った争いはまだない。

才能も、金も、顔もないが、自分にできることをやると決めて、

初歩的なモンスター退治、薬草集め、生態調査のクエストをこつこつとこなし、老後の資金をため続ける。

時折、見返りを期待して初心者を引き率したり、助けたりしている。

そうした活動を15年間続けてきたため、現場の人間や、他の冒険者からは莫大な信頼を得ているが、本人はそれさえも自分をまた利用して、だまそうとしてしていると疑っているため、距離を置いている。

ぶつちやけ、老後の面倒を見る気満々の女子たちがいるため、

早く冒険者をやめて、自分のヒモになってほしいと彼女たちからは思われている現状。

昔助けた冒険者や、教導した者たちは大成しており、

彼が冒険者をやめようとしたら彼らに取り込まれることは必至である。

座右の銘は「この世のすべてを疑え。・・・あと、処女は都市伝説」というひどいものである。

結婚を約束していた惚れていた幼馴染がNTRされてからは、

女性不信に。

伴侶を心の奥底では望んでいるものの、結局みな嘘だろ？と疑い続ける。

アリス

髪は紫色、瞳は紅く染まっており、恰好は黒のゴスロリ服。

長くのばされた髪は手で触れればちぎれてしまいそうな柔らかさ。

いつもカネツグの”影”の中に潜み、365日24時間監視している少女。

その正体は、裏社会で知らない人間がいけないほど有名なヴァンパイアの女王、クイーン・ヴァンパイア。

元々は人間だったが、300年前に起こった第7次世界大戦で、家族を失い、路頭に迷っていたところ、ヴァンパイアに噛みつかれ、同種にさせられた。

その後、力を蓄えた彼女は、裏社会でヴァンパイアだけによる、

モンスターの勢力をまとめあげ、争いばかりし続ける人間を滅ぼすことを計画。

しかし、現代のリーダーダス王国由来の勇者、サッドに殺されかけ、命からがら脱走。

逃げ出せたはしたものの、そこで力を使い果たした彼女は

他のモンスターの餌になるところに。

そこに偶然通りがかったカネツグが、討伐対象でもあった、

アリスに襲い掛かったマザー・ウォルフと4時間にわたる死闘の末、撃退。意図せず彼女を救うことに。

彼にとつては、討伐対象のそのモンスターを倒さなければ、

飢え死にするほど食い詰めていたため、必死に戦っただけなのであるが、

アリスからすれば、”どうみてもレベル1しかない弱い人間が、モンスターである自分を命を賭けて守ってくれている”と映った。

性格は気に入った相手のことをすべて知らなければ気が済まない依存系。

夜な夜な、睡眠魔法をカネツグに掛けては逆レイプ。

口数は少ないが感情がないわけでもなく、

思いつきりカネツグには心を開いており、隙あらばスキンシップする。

将来の夢は、二人つきりで質素な教会で結婚式を開き、

小さな一戸建ての家に、夫婦だけで慎ましく生きること。

エル

幼いころに王宮を抜け出したところ、人さらいに遭遇。

誘拐されそうになったところをカネツグに助けられた。ちなみにカネツグはその時、

彼女を助けるためにリンチされながらも逃がしきり、全治1か月の重傷を負っており、

多くの人間が毎日変わりばんこで見舞いに来る状態だった。

そのあと、人さらいたちと似たような人間が複数名、川に打ち上げられている。

カネツグに会うために身分を隠しながら冒険者をはじめ、彼につきつきりで戦闘を教わった結果、才能が開花し、今では一流の冒険者の仲間入り。

王位継承権第一位なので、彼女が王宮にいないと大騒ぎになるのだが、

影武者と入れ替わっているため、いつも王宮にいと周りからは思われている。

魔法、武器、素手での戦闘。すべてがハイレベルなオールラウンダー。

その上、政治が上手く、人を言葉一つで人生を破滅させられるほど、策謀に長けている。

誰もが見とれる美貌。体つきはGカップの爆乳に、身長は155cmというエロボディ。

さすがに王位継承権1位の彼女に粉をかける男はいないが、身分を隠しながらギルドに来ているときはよく、男からナンパされている。

ちなみに、自分がナンパされていても、まったく嫉妬もしてくれないカネツグをハイライトがない瞳で見つめていた。

この作戦は効果がない、と判断した彼女は外堀を埋めるため、

周りの人間にそれとなく、”あの人が私の気持ちに気づいてくれないんです・・・”

と吹聴して回っている。

彼女自身は、国家のことは割とどうでもよくなっております、

何かあっても、最悪彼を拉致つて、どこか二人つきりで永遠に生き続ければいいや、と考えている。

将来の夢は、”オヨメサン”（震え声）

レテ

実は”世界最高の鍛冶師”になれるスキルを持っている。

その才能が開花する前、周りからは鉄くずしか生み出せない半端モノ、と言われていたが、

冒険者になったばかりの主人公と出会い、自分が作った剣を買ってもらったことがきっかけで付き合いが始まる。

その後、10年間、1日たりとも休まずに鉄を打ち続けた彼女は世界最高の剣を生み出し、

王家の目に留まることになる。

本人も剣を扱う上での心構えができており、
実力は折り紙付き。

今回、彼女が作った刀は実は昔彼女が王家に依頼されて作った剣をはるかに上回る、
いわゆる”斬鉄剣”だが、それと買った本人はよく斬れる刀だなー、ぐらいにしか
思っていない。

格上のモンスターとか相手にしないから真価がわからず。

女のくせに、鍛冶師になるなんて、と周りから言われていた十才能が開花せずに落ち
こぼれ扱いをされていたため、村に帰ろうとしていた時、

客としてきたカネツグに剣を買ってもらい、その自分が作った剣でモンスターを倒せ
たことを知り、自信を持つ。

商家とも太いパイプを持っているため、特注の依頼がどんどん来て、とつくに人生遊
ぶだけで生きていけるほど金を持っている。

が、本人はそれをすべて”結婚資金”として手を付けておらず、
周りの冒険者や、貴族からアプローチを掛けられていても、
”すでに先約があるから”と一蹴。

レテが割と軽いと思つたそのあなた。

有無を言わず、想い人と結婚できる、添い遂げられると信じて疑わないやべーやつだと言えば、少しはやばさが伝わるはず。

マリー

国の債権を保有しまくっている豪商の娘の子。

毒によつて意識不明の重体になっていた両親を持つ。

その原因は敵対している商売敵に毒を盛られたため。

彼女自身は小さかったところに両親が意識不明となつてしまったため、

親戚に、持っていた資産をどんどん奪われてしまつていた。

とうとう、政略結婚による立て直しをするところまで追いつめられていたが、

カネツグによつて頼まれたギルドマスターにより商売仇の違法行為が露呈、発覚。

あわやといったところで結婚話は消えることに。

また、同時期に、彼女に支援を申し出る商家が後を絶たなくなり始めた。

カネツグいわく、「・・・あそこのおじさんと、おばさんには、昔助けてもらった。そんだけだ。・・・それだけに決まつてんだろ。」と、酒の席でぼろりとギルドマスターにこぼした。

そのことをにやにやした顔つきのギルドマスターによつて知らされた彼女は、

両手でほほを抑え、湯気が出そうなほど真つ赤な顔色になりつつ、身もだえしたとい

う。

カネツグの伝手で、腕利きの薬剤師が連れてこられ、

両親のかかつていた毒が解毒され、マリーは再び色んな意味で熟成されることとなった。

”カネツグ様。年の差婚について、どう思われます?”とよく、彼に尋ねる姿が。

両親には事情を説明+根回し済み。

毎日、彼女から、”おいしいご飯食べさせてあげますから、来てください!!”と叫んでいるカネツグは、

”いや、さすがに毎日行くわけにもいかねーだろ・・・”とマジレスされている。

両親が回復後、覚醒したマリーの経営手腕がいかに発揮され、

商家の規模を全盛期の30倍まで膨らませ、実質、国を支配することに。

将来の夢は、”カネツグのためだけに作った家で、カネツグのためだけに作った料理だけを毎日食べてもらい、”カネツグだけに見られながら、カネツグだけを見て生きていき”

、”カネツグだけに愛され、カネツグだけ愛し続けること・・・死ぬまで、死んでも”

性格は生真面目ながら、ジョークも通じるノリのいいお嬢様。

エルと同レベルの頭の良さをもち、

本人も魔法使いとして最強クラスの戦闘力を持つ。

基本の5大属性魔法を極めた、スタンダードな魔法使い。

彼女が火属性の魔法にありつただけの魔力をこめれば、

それは隕石のような大きさのメテオとなるレベル。

自室には、カネツグの備品や、似顔絵が所狭しと飾られており

いつも自分と、カネツグに似せた人形と、子供（だと本気で思っている）人形の3人で、将来のあれやこれやについて楽しそうに話している（）

エマ

ギルドにいる受付嬢。

髪は青色。瞳は金色。髪型はポニーテール。

いつも笑顔がステキな受付嬢として、ギルド員、冒険者、貴族たちからあこがれの的となっている。

プロポーズされまくっているものの、すべて一蹴。

また、彼女自身も一流の冒険者であり、そのレベルは80。鉄塊と思うほど巨大な大剣、”ドラゴン・キラー”を振るう。

かつて、元十王にして、”劍魔”と恐れられた、アルバーツ連邦の劍士、”フジワラ・クルツ”が所持していた伝説の劍。

この人物は現、十王の先祖でもある。

その正体は、かつて、”人間加工牧場”と呼ばれる悪魔が運営する食肉産出場で出荷のために生みだされた人間家畜。

時間魔法の応用によって、0歳から10歳まであつという間に成長させられた。

出荷のために殺されそうになった時、売り上げの分配に不満を持っていた悪魔が反乱を起こし、牧場内が混乱に陥った。

その間に彼女は逃げ出し、一番近くにあつた街まで逃げてきた。

そこで運悪くというか、良くというか、裸の彼女と出くわしてしまったカネツグは

”クエスト終わって、後は家に帰ろうと歩いていたら、突然、その曲がり角から恐ろしいほど美しい、裸の幼女が焦点のあつてない目つきでふらふらと歩いてきて、マジで心臓止まるかと思つた・・・”と語る。

赤子レベルの精神性しかなかった彼女は、その後、

カネツグに保護され、2年ほど一緒に暮らし続ける。

その間に、カネツグは人生において必要な教養、知恵、サバイバル技術、社会常識を赤ん坊の彼女に叩き込み、普通の社会人レベルまでもっていった。

12歳になった彼女は、”お前が6か月間暮らせるだけの蓄えだ。・・・あと、知り合いに頼んで手続した借り家がある。そこでこれからは暮らせ。・あばよ、クソガキ。もう二度と、俺に世話、焼かせるんじゃないぞ。”と言われて、家を追い出された。

その時、彼女は自殺を考えていたが、”いや、死ぬんだつたらカネツグのために死ぬべきであつて、彼のモノである自分の体を勝手に壊しちゃいけない”と考え直した。

それから8年。

時間があるときはまめにカネツグに会いに行き、

変な虫がついていないか確認していた。

合格率5%以下の難関試験を突破し、見事ギルドの受付嬢に。

また、彼女自身も一流冒険者の仲間入りを果たしている。

カネツグが自分の”父”として、自分を助け、育て、救ってくれたことから、ならば自分は彼の”嫁”にして、”母”である、と認識している。

(※娘、ではなく母、であろうとしているのがポイント)
将来の夢は

”自分と彼以外何も存在しない場所で永遠に生き続けること”

それがだめなら、毎日子供をはらむくらいセックスし、

妊娠すると二人つきりになれないから、雷魔法で精子を殺しつつ、
避妊すること。

自分の子供ができると、カネツグを取られてしまうかもしれないと考えているため。
子供のころは無感情、冷淡。

しかし、ずっとそばで彼女に根気よく接し続けたカネツグにより、

よく笑い、よく泣き、”——絶対に幸せになつてやる”、と自ら思えるほど、人
間らしくなった。

貯金は人生10回遊んで暮らせるレベルで溜まっており、
何かあればすぐにカネツグを拉致して、どこかに行こうと思っている。

ファルバム・シユタラス

元々は戦争に負けて没落した国の元貴族の商人。

お抱えの傭兵を持っていることから、”商家兵団”と呼ばれている。

食い扶持に困っていたしがないアラフォーだったが、

カネツグに出会い、とあるものを過去の伝手をもとに売りさばいた結果、

国でトップ5に入る富豪に上り詰めた。

信用を第一に考えており、

相手がどんな人間かによって借金の利子を決めている。

彼自身は公平な金融屋であり、

グレーに差し掛かることはしても、

違法行為はまずしない。

ちなみに、カネツグが彼から金を借りる場合、

利子はほぼないに等しくなる。

自分の姪を彼にあてがおうと画策している。

姪？ヤンデレに決まっているだろ（絶望）

豪商のマリーとは、ビジネスパートナー。

アリシア・レティス

孤児院を経営する、未亡人みみたいな女性。

実は未婚。しかもこの時点だとまだ未成年。

その正体は、帝国最強の呪術師家系、レティスを祖とする貴族の元跡とり。

政略結婚にて他国の有力貴族に嫁入りする予定だったが、

呪術の実験に失敗し、子供が産めなくなった結果、

破断し、実家からも勘当されてしまう。

孤児院を経営しているのは、

子供を産めないからか、それとも……。

心にぽっかりとあいたすき間。

女として死んだも同然の彼女を救ったのは……。

アルバーツ連邦の”法術”魔法を改造して作られた”呪術”を扱う。

彼女が魔力を込めて”死”を願えば、力なきものは瞬く間に死ぬ。

呪いすなわち、祝福は使い方によっては人の力を引き出すことも可能である。

死者を傀儡とする外法、”禁術”を有する。

（”十王”、”聖騎士”ピエール、”酒吞童子”と同じ）

彼女の好きなプレイは、仰向けで寝っ転がっている相手の顔に自分の胸を押し付けて、胸で圧迫し、もがくところを見ること。

しかし、生娘のため、妄想でしかできていない。

カネツグが生きているときも傍に。

死んだらアンデットにして、自分の傍に。

とにかく、何もかもが”重い”系のヤンデレ。

過去にアリスと2度戦い、引き分けた実力を持つ。

Aランクパーティー。

リーダーのアンナ。護衛のレイ。参謀のアンジェラの3人娘パーティー。

とある理由により、金を稼ぐために街にやってきた。

借金で目的は達成したが、返済することができず、

親の形見である装備が質に取られたまま。

偶然見かけて、まちで話題の”プロフェッショナル・E”と呼ばれる

カネツグにモンスター^①の倒し方を教えてもらうようお願いする。

(※カネツグは、冒険者になった人に配られるガイドブックにて、

名前、経歴が詳しく書かれており、こういう冒険者を目指すようお手本として描かれている。駆け出しの冒険者で知らない人間はいないレベル。なお、本人は知らない。)

性欲とかがヤバイ。

現在はAランクの冒険者として活躍している。

アンナは独占欲、レイは妄信、アンジェラは依存系のヤンデレ
やっただぜ()

転生したけれども、レベルはあがらないし、顔はブサイクだし、美人局と罨を避けながら今日も俺はうだつの上がない生活を送る

神様転生というものは今日ではメジャーだ。

死んだ人間が神様と謁見して、

なぜかチートをもらって別の世界に転生するというファンタジーものである。

10年前ならいざしらず、今となってはあまりに作品の数が多すぎて、

数えることが不可能なほどである。

この俺、カネツグごと、金田嗣臣もそんな転生を果たした人間の一人だ。

神様転生させてもらって、無双やハーレムと思いえがいたその人。

ちよつと待つてほしい。

現実はそのも簡単ではないのである。



「それじゃ、これを。」

「ういっす。」

新たなる世界、リア大陸に転生を果たした俺は、

とある町、エルグランドの冒険者ギルドにて斡旋された仕事を受け取っていた。

至つて世界の構造は簡単、単純。

ドラク●ばりのファンタジーな世界。

魔法もあれば、レベル制による強さの違いも存在する。

生まれ変わつて早30年。

今では立派なアラサーである。

村出身の次男坊のため、長男が家を継ぎ、俺は追い出される形で上京してきた。

で、今では15年間もスライムやゴブリン相手に戦い続けるベテラン冒険者である。

・・・これだけ聞きやあさぞかし凄そうに思えるだろう。

しかし、しかしだ。

15年間もレベルが上がらない人間が一体何の価値があるのか？

そんなことを考えながら、危険事項承諾の契約書に署名をしていると、
受付嬢のエマさんが話しかけてきた。

「……あの、カネツグさん？」

「……何でしょうか？」

ちよつと身を引きながら、距離をとる。

俺の後ろにまた、あいつらがいるのだろう。

だから、エマさんは困った顔をしているのがわかる。

「……カネツグさん!!」

ものすごく振り返りたくない。

ああ、畜生。なんでずっと絡んでくるんだヨ、

と思いつつも名指しで呼ばれたからには無視をするわけにはいかなくなった。

「一緒に、クエストを受けに行きませんか?」

「……無理です。」

俺の言葉にこの世の終わりのような顔をする美女。

金髪ロングの髪に、碧眼。

騎士を思わせる鉄製の防具。

腰には。業物と思わしき剣を携え、グラマラスなボディを惜しげもなくさらす。

そんな彼女の後ろというか、ギルドの入り口の近くに銀髪と、黒髪と同じくロングヘアの少女たちが俺たちの様子を見守っていた。

何事かと視線を向けてきていたギルド員や冒険者たちも、

ああ、いつものことかといった風に興味を失くした。

というか、一言いいたい。

「俺はレベル1の最低ランクの冒険者ですよ？」

あなたはもつとふさわしい相手と組むべきでは？」

「そんなの関係ないです!!・・・わ、私は、貴方と一緒にいたいんです!!」

いや、マジで勘弁・・・と思っていると見守っていた受付嬢のユマさんが、
ずい、と身を乗り出して口をはさんできた。

「・・・エルさん?カネツグさんが困っているので、

勧誘はそこまでにしてもらえますか?」

「・・・エマさんには関係ないです。」

びき、と空気が凍る。

途端に、退避しだすギルド員と冒険者たち。

あー、はいはい。

なんか好意を持たれているようだねー。そうだねー。

んなわけねえだろ。

大方からかかってきているか、罰ゲームでモーションかけてきているだけだつっの。
昔みたいに女に騙されてたまるか。

最低ランクの冒険者がキャリア嬢と、Aランク冒険者から好かれていたわけもなし。
言い争いをしている二人を無視して、さっさと冒険に出かけるのだった。

◆ 「おらあつ!!!」

「びぎっ!!」

平原まで移動した俺は、スライムに向かつて粗末な剣を振るい、両断する。

戦闘力の高くない大人であれば苦戦する相手だが、ステータスが低い俺でもなれば
倒せる相手だ。

モンスターをあらかた駆逐したところで、自生している薬草をぷちぷちむしり、袋に入れていく。

薬剤師や商人に売ればいくらか金になるため、なかなか馬鹿にできないからだ。腰に括り付けてあるナイフで金になりそうな植物を狩り、

ふうと一息ついた。

ちよつと早い、そろそろお昼休憩にすつか。

がさがさ、と麻製の袋から作っておいた堅麦のサンドイッチを取り出し、

口まで運ぶ。

「……………」

——いつの間にか俺の正面に座っていて、俺が食べようとしたサンドイッチを見つめている少女。

髪は紫色、瞳は紅く染まっており、恰好は黒のゴスロリ服。

ぱつと見で、こいつやべー奴だとわかる姿だが、

気にせずにもう一つサンドイッチを取り出し、アホヴァンパイアの口の中に突っ込む。

「・・・てめえ、いい加減に俺からタかるのやめろっつーの。」

「むしやむしや。・・・うん、相変わらずカネツグのご飯はおいしい・・・。」

俺の言葉を無視してうつとりとした表情で、俺お手製のサンドイッチをむしやむしやするアホに、ため息を吐きながらも一つ一つのサンドイッチも口に突っ込む。

「・・・なんで、俺に絡む？もう、15年以上の付き合いになるけどよ。」

「・・・なんでだと思っ？」

むしやむしや、ごくんと食べ物を咀嚼し、

俺の瞳をじつとのぞき込んでくるアホ。いや、ちゃんと名前くらい呼んでやるべきか。

こういう時、普通の野郎だったら「あ、こいつは俺に気があるんだな」と思うだろう。だがしかし。しかしだ。

俺はすでにそんな勘違いをするほど馬鹿じゃない。

こいつが俺の何を狙って付きまといてくるか知らねーが、やらせはしねえ。

「知らね。・・・おら、さっさと帰った帰った。」

俺は今からモンスターを退治して、今日の飯にありつかないといけないんだからよ。」

「……………」

俺の言葉に明らかにぶっすー、と不機嫌になるアリス。

美形って得だよな。

どんな表情浮かべていても様になっちまうんだから、とぼるぼるぼると嫉妬しつつ、
剣を持ってまたモンスターがいるところまで歩く。

「……………」

「……………」

てくてくてく。ぴたり。

「……………」

「……………」

てくてくてくてく。

ぴたり。

「……………ついでくんじゃねえよ!!」

なぜか無言でストーキングしてくるアリスに向かってがああ、と吠える。

うつとおしい。一体何しに来たんだこいつ。

「……カネツグ。何が欲しい?」

「は?なんだよ急に?」

「いいから、答えて。」

急にそんなことを言ってきたアリスに向かっていぶかしみながらも、

顎に手を当て真意を探る。

……ははーん。わかったぞ。

(……俺に恩を売っておいて、信用を得て、

俺から金をだまし取ろうってんだな? ……いや、こいつがそんなことを考えるわけ

もねーから、他の誰かに利用されているって線が高いな……)

「カネツグ。答えて。早く。」

再度問いかけてくるアリスに向かってにやり、と笑みを浮かべながら答える。

こういう相手のあしらい方はわかっている。

「……特になんもねえな。」

「……何も? 何も無いの?」

「ああ。」

下手に何かをしてもらえば、それ以上の見返りを要求されることは必須。

だったら、最初から何も受け取らなきやいい。
それが最強にして、最善の護身だ。

「……………」

「……あ？」

俺の服のすそをそつと握ってくるアリス。

なんだ？何やってんだこいつ？

「……………邪魔しないから、モンスター退治するところ、見ていてもいい？」

「あ？……ああ、邪魔しねーならいいけど……………」

変なことを望むやつだなー、と思いつつ、

手を振り払い、両手で剣を持ち、近くにいたスライムに斬りかかる。

じつと、背中に浴びせられる視線を気にしないようにしながら。



「あー。疲れた……………」

とぼとぼ、と装備をひっさげて平原から町まで戻ってきた。

腕が上からなくらい剣を振るったからか、

若干ぶるぶる腕が震えている気がする。

明日は筋肉痛だな。すげーめんどくせー。

いつの間にかいなくなっていたアリスのことを頭の中から追い払い、

今日の実入りについて計算する。

ギルドの中に入り、受付嬢にモンスター討伐数カウント用の魔法石を渡す。

「クエスト終わったので、報奨金のほどを．．．。」

「あ、はい。」

そういえば、言い合っていた二人はどうしたのだろうか。

姿が見えないが。

まあ、どうでもいい。

さっさと金だ、金。

稼いだ金で何を食おうかなー、と考えていると、

会いたくないやつとエンカウントしてしまう。

「．．．げっ。」

「．．．あつ。」

近くのテーブルに座っていた、ぬいぐるみを抱えた、黒髪ツインテールの幼女。

俺を見つけた瞬間、笑顔を浮かべながら突進してきた。

「お兄ちゃん!!」

「ぐほおっ」

子供とはいえ、とびかかれるとやっぱりきつい。

ましてや、こちらはクエストを終えたばかりで疲れているので猶更だった。ロリコンと思われたくないの、さっさと会話を打ち切ろう。

そうしよう。保身、大事。

「あー。エミちゃん?おじさん、ちよつと疲れているから、今日は……。」

「はい、これ!!」

彼女が手渡してきたのは、なんか緑の色をした液体が入った瓶だった。

「……なんだ、こりゃ?」

「……おい、あれ……!!」

「ああ……。」

なんだか何人かの人間が瓶を見て、ざわついている。

やめろよ。

俺が幼女にタカっているわけじゃないから。

通報されたら一発で負ける自信があるんだぞ。おい。

「飲んで!!」

「.....」

「ここで？」

今すぐに？

断ろうものなら、明日からきつと俺は、幼女を悲しませた極悪人としてその名を刻む

ことになるのだろう。

でも、それはそれとして別に飲みたくない。

この子に悪意があるとは思わないが、万が一変なもので毒だった場合、

害を受けるのは俺である。

しかし、目の間できらきらと瞳を輝かせる幼女に向かってお願いを断れるほど、

俺のメンタルは強くなかった。

覚悟を決めてぐいっとキめる。

「.....おっ」

「えへへ．．．．．ポーシヨンだよー。」

飲んでみたら体から倦怠感が消えた。

なるほど。ポーシヨンだったのか．．．．

わざわざ俺にくれたのか．．．．．

ぐしゃぐしゃ、と頭を右手で撫でてお礼を言う。

「あんがとよ。エミちゃん。」

「お兄ちゃんの役に立てて嬉しい!!」

にへー、と笑顔を浮かべるエミちゃん。

あー。悪意のない無邪気な笑みが気持ちいいぜー。

俺の事慕ってくれてるし。

「．．．あのね、お兄ちゃん。エミとの約束、覚えてる？」

「．．．．．あー。あれね。うん．．．。」

べたというかなんというか。

俺はこの子に、将来お嫁さんにしてくれと頼まれている。

一度命を救ったからか、恩を受けたことを好意と勘違いして、

しきりにこういったことを言ってくる。

悪い気はしない。

女は基本、クソ、なスタンスの俺でさえ、彼女はある意味聖域である。
けどなー。

どうせ数年後には同年代のモテるイケメン相手に貫通式して、
使用済みになるだろうし。

過度な期待を持つべきではないことはわかっている。
俺はもう間違えないぜ。

「あー。はいはい。守る守る。うん。」

「……絶対だよ?」

抱きかかえているぬいぐるみに顔を押し付けて、

とんとん、と脚を鳴らす彼女。

こんないい子も数年後には汚れちまうんだろうなー。

中身とかも含めて。



ギルドから帰る道すがら、知り合いたちに声を掛けられ、

立ち止まる。

「よう。」

「……お前か。」

「んな露骨に嫌な顔すんなってー。」

あつはつは、と笑う緑髪、ショートカットの美女。

恰好は露出の多い女戦士のなプレートメールである。

ピンク色の色合いがなんかエロい感じがする。

こいつとの付き合いももう、10年以上である。

名前は、マチという。

そういえば、そろそろ2x歳

「……今、変なこと考えたか？」

「考えてないっす」

無表情で手に持っている槍を突きつけてきたので、

両手を上げて降参の意思を示す。

レベル50超えの一流冒険者に勝てるわけなので強い者には巻かれるべきである。
そんな俺の姿を見て、やれやれ、と肩をすくめるマチ。

あー。エロい格好だな、しかし。

俺にもこんな相手がいたりやあなと一瞬思ったが、

ありえないし、ありえても俺のへそくり狙いぐらいの美人局しかないと自覚し、
改めて雑念を打ち払う。

そういうのはイケメンと、金を持った奴の特権だからな。

勘違いは恥をかくだけだ。

「……で、なんだよ?」

「最近調子はどうなんだ?」

「あー。いつも通りだつーの。」

「……レベルあがらねーし。雑魚くらいしかまともに戦えないし。」

「……ふーん。」

「こいつにとつては至極どうでもいいことだろう。」

くすぶっている同期のことなど。

生きている世界が、もって生まれたステータスが違う。

「……で、明日も行くの?」

「ああ。……老後の資金もためとかねーとな。

……動けなくなったら飢え死にするし。」

「今から老後のこと考えるの早すぎないか?」

「うるせー。」

こっちは必死なんぞい。

話も終わったのでさっさと家に帰る。

「あ、そうだ。この後暇か?」

……よかつたら一緒に来てくれ。」

だが、そうは問屋が卸さないらしい。

大方荷物持ちが欲しいといったところだろう。

前も騙されて散々こき使われたからわかる。

「ヤダ。今日はもう疲れた。寝たい。」

「……。」

「お前が声かけりゃ、荷物持ちの男位、

「ほいほいくんだろ。」

「……そうか。」

「ああ。……じゃあな」

ふああ、とあくびを手で押さえながら今度こそ家まで帰った。



「……。」

そーつと扉を開ける。

何の変哲もない一軒家。

現代日本でいうならば、中間所得層が住んでいそうな木造性の二階建て。

俺がローンを組んで得た家だ。

俺だけの城ではあるが、そんな城には今、

有能だが厄介なやつが一緒にいる。

「……おかえりなさいませ。」

音を立てずに中に入ったが、いつもの通り補足され、

いつの間にか俺の前に立っているメイド服の銀髪美人。

料理を取り上げられるのは嫌なのでちゃんと言う。

「いただきます。」

「召し上がれ。」

—— 結局、食事中に会話らしき会話は特になかった。



「あー。ねむ．．。」

自室のベッドに身を投げ出し、ダイブする。

シャロも俺も、さっさと寝ることにして、

それぞれの部屋に戻った。

変わらない日々。

うだつの上がないキャリア。

活躍する同期。

ちらつく美人局。

チートなんてもんはなかった。

結局のところ、前の人生と変わらない。

(・・・・・・・・・・)

夢は夢、か。

さつさと老後の資金をためないと、

冒険者をできなくなった時に死ぬことになる。

幸い、シャロはそんなに高い給与でもないし、

クエストからは安定して、現代貨幣でいうと24、5万は稼げている。

このままいけば後30年後には老後の資金もたまり切るだろう。

あまりにも長く思える道のりだが、才能がないなら地道にやるしかない。

もし、俺にほんの少しでも才能があつたら・・・。

胸のもやもやとしたものが渦巻き始める。

(・・・・・・・・・・) けっ。アホか。現実が現実)

すぐに自分の中から追い払おう。

ないものはない。

才能も、力も、そして、伴侶も。

(・・・明日も、また、モンスター退治して・・・それか、ら・・・。)

明日の予定を立てながら、俺の意識はうっすらとフェードアウトしていった。



「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

カネツグを転生させた神と、その補佐である天使。

転生後の彼の様子を見守っていたが、

はあ、と手でこめかみを抑えながら神はつぶやく。

「・・・・・・・・まさか、渡した祝福によつて恩恵をあずかっていることに気がつけない状況

とは・・・・・・・・。」

「最初に組んだ相手に騙されて、その次は美人局。とどめに、

好きだった幼馴染がイケメン、高収入の青年にNTRられ、今に至ると。」

「なんでこうなる?。」

カネツグはぐつすりとベッドの上で眠っている。

そして、そんな彼のベッドの下から這い出てくる黒のゴスロリ服を着た美少女。

彼と付き合ひの長い、ヴァンパイア、アリスである。

じつとカネツグが眠っているベッドを見下ろし、

無表情だった顔つきを一瞬でとろけた笑みに変貌させる。

『……えへへ♡カネツグ、カネツグ、カネツグ……♡』

服を一瞬で脱ぎ捨て、カネツグが眠っているベッドにごそごそ、と潜り込み、
ん……♡と嬌声を上げ始める。

「……昔、偶然助けたヴァンパイアが、勇者に討伐されて死にかかっていた裏世界で名前を知らない者がいないクイーンヴァンパイアだったと。」

「良縁を結べる祝福とはいえ、偶然恐るべし……」

おっぱじめたアリスと、睡眠魔法をかけられ、眠らされたまま逆レイプされるカネツグを見て、

苦い顔をする神様。

そして、ひとしきりやって満足したのか、アリスはまたベッドの、

いや、カネツグの影の中に溶け込み、消えていく。

「いやあ、まさか影の中にひそめるとは。」

「マジモノのストーリーカーとは……。」

そして、入れ替わりとばかりにドアが開けられ、

ピンクのパジャマに着替えたシヤロが部屋に入ってきて、

カネツグのベッドに入り込む。

『……カネツグ様……♡♡』

そして、またもや始まるベッド運動。

「あの人、数千年を生きた龍なんですよね。」

「どこでどうやったら、偶然出会って、偶然彼女の孤独を癒して、

なつかれて、実は一年中発情期、ってことになるん？」

見たくないとはばかりに見ざるになる神様の肩をとん、とんと叩く補佐。

世界を救えるだけの器を持つ人物。それがカネツグだったはずなのだが、

なぜかレベルはあがらず、与えたチートの恩恵に気が付けない日々を過ごしているこ

とに、

頭を悩ませていた。

「彼の周りにいた受付嬢は、彼が15歳のころに出会って、行き倒れていたところを仕方なく助け、

それから前世の知識を生かして勉強を教えて文字を読めるようにし、現在出征街道を
驀進している

キャリアアウーマンですね。・・・そして、彼のことか死ぬほど好きで、魔法を使つて
監視しているようです。

それも、今この瞬間も。」

「あーあーあー!!聴きたくない!!聴きたくない!!」

だが、そんな神様もお願いもつゆ知らず、無情にもどんどん地雷がリストアップされ
ていく。

「王位継承権1位の姫騎士こと、エル。幼いころに王宮を抜け出したところ、人さらいに
遭遇。」

誘拐されそうになったところを彼に助けられたとか。・・・ちなみに彼はその時、彼
女を助けるためにリンチされながらも逃がしきり、全治1か月の重傷を負っておりま
す。そのあと、人さらいたちと似たような人間が複数名、川に打ち上げられておりま
す。」

「・・・で。彼に会うために身分を隠しながら冒険者をはじめ、彼につきつきりて戦闘を
教わつた結果、才能が開花し、今では一流の冒険者の仲間入り、と。」

「そのほかにも、孤児院で虐待されていた少女を偶然助けて以降、本人が気が付かぬ状態

ですつとストーキングされていたり。無理やり政略結婚させられそうになっていた豪商の娘を救い、内密に両親公認で許嫁にされてロックオンされていたり……。しかし、本人は女性が近づくとすぐに逃げたり、好意を寄せられていることを知りつつも絶対に認めようとせず、美人局と疑っております。」

ざつと並べただけでその数、100人以上。

しかもいづれもがこの世界において実力、権力、財力を持つ人物である。

彼のチートは、単純。

人脈チート。

それも、自然と力を持った人物とつながりやすくなる幸運の極致である。

「……ちなみにこのまま放置しておくとうなる？」

「……彼をめぐって、世界大戦が起きます。」

ああ……と突つ伏す神様とその補佐。

仕方ないと、つぶやき、神様は覚悟を決めたような顔つきになる。

「……今更かもしれないが、テコ入れだ。」

「え。」

「とりあえず、彼のレベルが上がらないことはしょうがないから、

その周りの女性関係、地雷をどうにかするぞ・・・!!

このままでは、修羅場どころか、世界大戦が起きかねん・・・!!」

「・・・・・・・・(大丈夫かな。)」

つづくとやばいのでつづぬ

なんか、最近いつも以上に色んな奴に絡まれたりしてるが、それらすべてを避けつつ、今日も俺は仕事にいそしむ

朝、目が覚めて、朝食を作り、食べる。

今日の予定を確認して、準備をする。

俺を見送るシャロと別れて今日は武器屋にやってきた。

最近、冒険者を始めてからずっと使っていた剣がそろそろ使えなくなってきた、新しいものを見繕うことにしたからである。

下取りを兼ねてなじみのおっさんがいる武器屋までやってきた。

相も変わらずひげを豊かに蓄え、青のバンダナを頭に巻いているおっさんは、

かん、かんと鉄を熱し、うち叩いている。

「おっさん。」

「ん？・・・おお、カネツグじゃねえか。」

俺が声をかけると、錬鉄していた手を止め、

笑顔を向けて俺のほうに近寄ってくる。

「金貨10枚だ。」

「ずずい、と身を乗り出して話に入ってくるレテとなるべく会話しないようにしながら、」

「おっさんとレテの会話を聞いていく。」

「じゃあ、ちようどいいのがあるよ。．．．ちよつと待っててね。」

「どたどたどた、と嬉しそうに表情をほころばせながら、奥まで何を取りに行ったのか引つ込む彼女。」

．．．あー。油断してた。

「今日はいないだろうと思ってたのに、面倒だわ。」

「がしがし、と頭で後頭部をかきむしっていると、」

「横にたっついてるおっさんに肘で突っつかれる。」

「そーいや、うちのとはどうなんだ？ん？」

「は？何がだよ？」

「とぼけんなんて。．．あいつ、おめーに気があるんだよ。」

「ねーだろ。」

「んなもん知らん知らん。」

「俺には必要ねーし、釣り合わねーだろうしな。」

おっさんのうざったい追及をかわしつつ待つこと数分。

レテは一振りの剣を持ってやってきた。

「お待たせ!!はい、これ!!」

「?なんだこりゃ?」

「アルバーツ連邦由来の”日輪”だよ!!」

いや、これどう見ても刀じゃねーか、と言いたかったが、

使えればどうでもよかったので、金貨10枚をおっさんに手渡す。

「あいよ。まいど。」

「私が作ったんだよ!!どう?!どう?!すごいでしょ!!」

「わかんねーよ。」

一ミリもすごさが伝わらず、そうこぼす俺に見る目がないな、とやれやれと肩をすくめるレテ。

ここの言ううぐいぐい来る奴は何言っても絡んでくるから、

さっさと会話を打ち切るに限る。

「ねえねえ!!今日暇?!?暇?!?この後遊びに行こうよ!!」

打ち切る前におねだりされちまった。

こいつ……!!

恩を売った直後に要求してくるとは、なかなか計算高いじゃねーか・・・!!
しかし、しかしだ。

普通の男ならともかく、俺にはもうそういうものは効かない。
飯をおごらされ、荷物を持たされ、こき使われるのがオチだ。

「暇じゃねーよ。クエストあるんだよ。」

「えー・・・。休めばいいじゃん。」

「休めるか、アホ。」

老後の資金をためるために、早々休んではいられないんだつーの。

買った刀を腰に差すと、なかなかしやれた意匠があらわれた刀なのか、

一目で業物っぽい印象を受けた。

こけおどしにはちようどいいわな。

「おう。また来いよ。」

「ねえねえ!!私もついていっていい!!?」

「自分の仕事しろや!!」

引っ付いて来ようとするレテの攻撃をすべてあしらい、

速足で武器屋を後にするのだった。

◆
で、そうしてクエストを受けに来たものの、最低ランクの俺が受けられそうなクエストが特になく、マジかよ、とため息をつく。クエスト受けなければ金が手に入らない。貯金はあるが、それは老後の資金用なので崩したくない。その日にクエストを受けて、手に入れた金で生活費を回しているから、今日何としても受けなければならぬ。

募集掲示板の前で必死に探していると、一つだけ俺でも受けられるものがあることに気が付いた。

「………家庭教師？一日で金貨5枚とは羽振りがいいな。」

金貨1枚で一万円相当。

銀であれば千円。

銅は百円といった具合だ。

単なる家庭教師の仕事に5万払うバカはどいつか、依頼者の名前を見ると、

うえ、と声を漏らす。

やっぱりやめだ、辞め。

一度は手に取った依頼書を戻そうとすると、横から伸びてきた手で、

俺の腕をつかまれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「離せや。」

むすー、と不機嫌そうな表情を浮かべる、身なりの良さそうな青色の髪をサイドテ-

ルにくくった少女。

こいつか。こんなバカげた依頼をギルドに出したのは。

「どうして受けてくださらないのです?」

「報酬が依頼内容に比べて高すぎんだよ。馬鹿マリー。」

「こんなん、詐欺だと思っわ。」

「あら、心外です。王家お抱えの商家の跡取りであるわたくしが、

そんなことをするとでも?」

「意図が分からない以上、誰も受けたくねーよ。」

ちらりと周りを目で見ると、さっと目をそらす薄情者ども。

おいごら、野次馬っているのに、当事者になるのを否定するとはなかなかいい根性し

ているな？オイ。

つかまれた手を振り払い、向き直る。

「そんなん、王家の騎士団に所属している冒険者にでも頼めよ。」

それか、エリート魔法使い様とかでもいいだろうが。」

「わたくし、堅苦しい人たちは嫌いなんですー。」

マジでめんどくせえ。

「なので、気楽にわたくしが話せるあなたならば、

特別に家庭教師にしてさしあげても……って、どこに行くんですの!？」

「……。」

「ねえ?!ちよつと!？」

だだだ、と背中に掛けられる声を無視して俺はギルドから速足で逃げた。



「疲れた……。」

あの後も色んな奴らに絡まれては、

あれがしたいだの、これがしたいだの要求され、そのすべて突っぱねて川のせせらぎの音を聴きながら、ごろりと木の根元で寝転がっていた。

結局、クエスト受けずに日が暮れちゃったよ。

今日は野宿したい気分だわ・・・。

金を得ずに家に帰ったらシャロにお小言を言われそうで嫌だしな。

そうと決まれば話は早く、さっそく背中にしよっていたりユツクからナイフを取り出し、テントを張る。

いやー。

それにしても久しぶりの一人寝だわ。

やっぱり独り身が最高だな、と改めて実感する。

持ってきたとっておきの干し肉を噛む。

ちよう、しよっぺえ。

腐らないように塩を刷り込みまくっているからか、

健康なんぞしたこっちやねえとばかりの味になっているがそれがイイ。

夜空には星が浮かんでいた。

この世界ではよく星が見える。

がぶち、と肉をかみちぎり、もぐもぐと口の中で味わって飲み込んだ。

あー、と口を開けてもう一つ食おうとすると、

とんとん、と肩を叩かれる。

なんだよ、俺のもぐもぐタイムを邪魔するんじゃないよ。

無視してまた食べていると、今度は上からぼたぼた、とぬめった液体が頭に降り注いできた。

ぶちり、とキレて後ろを振り向く。

「ゴリア!!何すんだ．．．よ．．．」

「．．．．．。」

口を大きく開けたオオカミ型のモンスター、ウオルフが俺の周りを取り囲むように、散開しており、真上には、ひときわ大きな個体の、グレートウオルフがよだれを垂らしながら俺のこゝを見つめていた。

「．．．．．。」

「．．．．．わんっ!!」

ぐいっとのしかかられ、体の自由を奪われた。

モンスター娘に求愛されたが、どうせ最後は食料にされるだろうし、断りつつ、今日の夕食を食べる俺

「・・・え?! オーガ”が目撃された?!」

遠くの支部のギルド・マスターであるゴレムマスターこと、

ジーノは通信石越しに驚く彼女に続けて話す。

『そうなんですよねー。ランクBのモンスターであり、人里近くにはいないはずなのですが。・・・あ、こちらでは最近活躍中の、”紅蓮の悪魔”と、”紅蓮の騎士”によつてすぐさま討伐されたからいいんですけどね。でも、万が一そちらにそういうのがいたら・・・』

「・・・やばい。」

話を聴いていた受付嬢、エマこと、代理ギルドマスターは話の顛末を聴いて、
だからだと汗を流す。

秋は冬眠を迎える前のモンスターたちの気性が荒くなり、別のモンスターを襲うような危険な時期だ。

通常であれば、討伐クエストに向かうのは腕が立つ冒険者くらいだが、

そういう通常に当てはまらない、例外が一人いたことを彼女は思い出す。

『もしもし？もしもし？．．．あれ？切れちゃいましたかね？』

『．．．．．ジーノ？誰と話しているの？』

『あ、ドーナツツちゃん。』

『ドルナツツだつてんだろおおお!!』

『ああああああ!!』

なんか、通信石の向こうで絶叫が聴こえたが気にせず通信を切つて、自分が使っている監視魔法の様子を見る。

しかし、何かに阻害されたかのように、彼女の魔法では何も見えなかった。

(．．．．．カネツグさん．．．!!)

彼に何かあつたら大変だ。

そう思い、彼女はフルプレートのアーマーと、

龍を落としたといわれるドラゴン・キラーと呼ばれる大剣を装備し、

ギルドから出撃しようとしたところ、入り口でその人物と出会った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

——なんか、ちっちゃい獣耳少女を抱っこして、
ぺろぺろと頬をなめられながら困惑して立ち尽くしている姿がそこにあつた。



カネツグがグレート・ウォルフと運悪く出会い、
捕縛されていたところにさかのぼる。

普通でいえば、モンスターにつかまった冒険者の末路は、

「デッド・エンドだ。」死”以外にはありえない。

「ぐんぐんぐんぐん・・・・・・・・」

「」

——前足で体を押さえつけられたカネツグは、体長3mのおつきいわんこにしか
見えないグレート・ウォルフにぺろぺろされていた。

きゅん、きゅんと、時折甘い声を出しながら、周りにいた小さいウォルフたちも彼を
取り囲み、甘えるように体をこすりつける。

むちやくちやモフられていて、息が苦しい・・・。

だああああああ!!

ぶんぶん、と体を振るって擦りついているウォルフから逃げ、
ひととき大きなグレート・ウォルフに向かって叫ぶ。

「やめろやああ!!暑っ苦しいんだよおおおお!!」

「………駄目?」

しゅん、と耳と尻尾を垂れさせ、そうつぶやくグレート・ウォルフ。

いや、今は「名前付き」のさらに上のハイ・ウォルフ。

「お前らよお……。百歩譲って俺に会いに来るのはいいけどよ、

取り囲むのやめろや。生きた心地がしねーんだよ。」

「だって、みんなもカネツグに会いたがっていたし……。」

そう言つて、いつもの獣形態から、10くらいの見た目の女性に変身するウォルフ。

周りにいたちびつこどもも、それぞれが10歳くらいの女兒に変貌する。

しかし、耳や尻尾は付いたままである。

「レンつて名前、私につけてくれた。カネツグは私の恩人。

……つがいになってほしい。」

「い・や・だ!!」

いつものこと、いきなりのこと。

こんなことを言われてすぐに承諾する奴なんているわけない。

元々モンスターなのだから本能に忠実なのは仕方ないとしても、

信用できん。

もしかしたら、食料にされちまうかもしれないし。

「?町から離れたのはレンに会いに来てくれたからじゃないの?」

「離れてねーから!!」一時的な野宿だから!!」

こいつ、俺が文明を捨てて獣になったと思つて喜んでやがる。

こちらとこちらまだ文明の利器に頼っている人間様なんだよ。

つ、疲れた・・・。

どつかりとひいたシートの上に座ると、ちびっこどもが甘えるようにのしかかってくる。
た。

重っ!!

「にいちやーん!!」

「結婚して!!」

「子種ちよーだい!!」

「はらませて!!はらませて!!」

「重い!! 熱い!!」

「.....これが、夫婦の団らん.....?
んなわけあるか、と心の中で突っ込んだ。」

「.....」



かちかちかち。

時計が針を刻む。

かちかちかち。

秒針は規則正しく時を刻み続ける。

いくら見つめても、それは変わらない。

「.....」

彼女、シヤロは無表情で主人の帰りを待ち続けていた。こうして、帰ってこないことはしばしばある。

そして、それがどういう理由によるものかも、人間社会に溶け込んでいる彼女はわかっていった。

クエストが受けられないから、金が入らない。

それが気まずい彼は、どこぞで一夜を明かすのだろう。

——もし、それがほかの女のところだったら？

「.....」

ぶわああ、と腕に龍の鱗が露出する。

興奮状態になると、龍は自身の特徴を晒してしまう。

人間状態のまま、しっぽと耳が生えてしまい、

人間ではないことがバレてしまうのだ。

殺意。

ここではないどこかで自分の主人を癒しているであろう相手に対して、

彼女は嫉妬していた。

余談だが、彼女は数千年を生きた古の龍だ。

このリア大陸における最大国家、リーダス帝国の初代国王、”塵の霸王”と互角に渡り合った猛者である。

プレスだけで街を滅ぼせる劇物だ。

だが、彼女は必死に自制していた。

まだ、そうと決まったわけではないからである。

「……………」

シヤロは、自分が主人から渡されたペンダントを指でいじり、
気分を落ち着かせる。

自分は彼のモノである証拠を見ることで、

独占欲を満たされたからである。

「……………」主人様。」

彼女は、一睡もせず、彼を待ち続ける。

龍人シヤロは、今日も自分を抑え、主人の帰りを待つのだった。



レンとエンカウントして、無視して寝ようとしたら、

こいつらの集落到に連れていかれた。

どこもかしこもケモミミが生えた獣人か、獣形態のモンスターしかいねえ。

俺は周りの獣人たちからレンと一緒に歩いて見るところを見られ、

なんだ、夫婦か・・・と言わんばかりの視線を投げかけられた。

ちよつとまてや、コラ。

「・・・・・・・・・・おい、アホレン。」

「・・・・・・・・・・なに？」

ママですよー、とちびっこどもを抱っこしながらあやしているアホレンの脇を、

肘で突つつきながら聞いたです。

「お前、何か変なこと言いふらしてねーだろうな？」

「・・」

そんなことない。」

「おう、こつち見ろや・・・。」

目をそらしながら、パパは疑り深いんですよー、とちびっこに話しかけるレンにい

らつとしながら、

頬を引っ張ると涙目になりながら話し始める。

「……私たちが、結婚したって、長老に報告しました……。」「……ほーう。」

そうかそうか。お前はそういう奴だったんだな？

大方、他の雄どもから求愛されて、体のいい断る理由にするために俺とつがいだと嘘をついたと？

はっはっはっはっは。

「——おらあつ!!!」

「きいいううん!!?」

鼻に香辛料であるコシヨウを振りかける。

へぶし、とくしやみをするレン。

現地調達で捌いた食料を保存させるために持ってきたものだが、イラつとしたので使った。後悔はしてない。

「つたく。さつさと長老のところに行くぞ？」

「……誤解を解きによ……。」

「……DVに私は屈しない……。離婚調停には応じない……。」

「人聞きの悪いことを言うなや!!!」

あほなことを言い続けるレンを引きずりながら、

66 モンスター娘に求愛されたが、どうせ最後は食料にされるだろうし、断りつつ、今食を食べる俺

こここの長である長老の元まで向かうのだった。

既成事実積み重ね系獣ロリVS、ストーリーキングキャリア
ウーマン ふあいつ

「それでは!!カネツグと!!レンの婚約を祝って!!」

『『『『『カンパーイ!!!』』』』』

「.....♡」

「」

あれ?どうしてこうなった?

レンと一緒に誤解だと説明しに行こうとしたら、

なぜかレンに”今は婚約でいいから.....”と健気な女ムーブされ、

勘違いした長老に、”ならば、婚約の議を開くでしょう!!”と即興で盛大なもてなしを
されることになった。

ふざけんな、おい。

主賓がそんなせせましく座っているなど言わんばかりに、

一番目立つ場所にレンと二人で座らせられ、

お祭り騒ぎになった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっただぜ」

「おうゴリラ」

ハメラれた・・・!!

この集落に連れてこられた時点で察するべきだった・・・!!

一生こいつのために働くATMになるなど、冗談じゃねえ!!

結婚は人生の墓場だ!! 終わりだ!! 終末だ!!

前世でくそみそ働いていたのに対して顧みられることもなかった、

俺の親父みたいに最後は使いつぶされるだけだ。

ここから逃げ出そうとしても、

隣に座っているレンに腕を組まれ、しなだれかかれては難しい。

マジで逃げ場がねえ・・・!!

「カネツグ!! レン!! おめでどう!!」

「くうく!! うまくやりやがったな!! このこの!!」

そして、次々に俺と知り合いの獣人どもが、

酒とつまみをもって結婚のお祝いを言いに来る。

「で、子供は何人欲しいんだ？ん？」

「レンちゃん良かったわね。初恋が実って。」

「……………」

いくらでも、ほしい……………」

子供を作って、完全に逃げられなくするつもりか……………!!

こいつ……………!!

外堀を固めていやがる……………!!

通常であればもう詰み。王手。チェックメイト。

この状況を脱する手などありはしない。

だ・が・し・か・し!!

(俺はチートの力無しにこの世界を自分一人の力だけで生き延びてきたんだよ……………!!)

※無自覚だけです

これで勝ったと思うのは間違いだぜ、レン!!

スツと立ち上がり、酒をぐびぐびと飲み、そして宣言する。

「聞けええ!!この場にいる全員!!」

それまでの喧騒が、俺の叫びによってかき消され、

なんだなんだ？と疑問の視線が集まる。

よし、注意をまず引くことに成功した。

次だ。ここからだ。

「此度は!!俺とレンの婚約祝いに出席してもらって感謝の念ばかりだ!!」

「.....♡♡」

隣でレンが顔に手を当て、いやんいやんと身をくねらせている。

お前は、俺がこの婚約を認めたと思うのだろう。

浅はかだ。

策を弄するのならば二重にすべきだったな。

「——しかし!!妻をめとるには、俺はまだまだ弱く!!」

稼ぎも少ない現状だ!!」

女衆はまあ.....と頬に手をあて、

男どもはなるほど、とうなずいている。

論理は破綻していない。

俺は冒険者としては最低ランクであるし、所得は月にして23,4万円ほどしかない。

さすがにこれだけでは妻と子供を養っていくのは厳しいと、同意せざるを得ないだろう。

「だからこそ、宣言する!!」

レテに作ってもらった刀、”日輪”を引き抜き、

近くにあった岩に向かって振るう。

岩を少しでも削り切って、演出をするために。

(・・・そして、修行をする、冒険者のランクをあげると称して、時間稼ぎ・・・!!勝った!!)

だが、ここで予期しないことが起きてしまった。

——すばん

「……………あえ?」

斬りつけた岩がバターみたいにさつくりと切れてしまったのだ。

その光景を目にした獣人どもがうおおおおお!!と大興奮。

え? いや、え?

手に持った”日輪”と無残にも真つ二つに斬れてしまった岩を交互に見て、戸惑いながらも、すんでのところまで耐え、続ける。

「ち、誓おう!!俺はもつともつと強くなつて!!
もつともつと上のランクの冒険者になる!!」

——そして、その時に妻たる伴侶を迎えることを!!」

俺の言葉にうおおおおおおお!!と沸き立つ獣人ども。

騙せたのか、レンも目から涙をこぼして、浸っているようだ。

とりあえず、時間は稼いだ。

後は蓄えた金をもって、時期を見計らい、別の国までとんずらするだけだ。

そう。

俺の目論見は完璧だった。

この時までは——



「

「.....」

「.....」

冒険者ギルドに帰ってきたら、

なぜかフル装備のエマさんと、レンがにらみ合い、

その間に挟まれて気絶しそうなんだが。

ちなみに、レンがついてきた理由は、

”夫の成長を支えるのも妻の務め”だそうであり、
集落にいた獣人どもも快く送り出しやがたった。

糞が!!!

ちゅーか、なんでエマさんフル装備なんだ・・・？

困惑しながら事の成り行きを見守っていると、

エマさんがレンに話しかける。

「.....えーと。あなたは獣人、よね？」

いえ、それは珍しくないのだけれども、

どうしてカネツグさんと・・・？」

いつもの受付嬢スマイルがひきつり、
頬がびくびくと動いているエマさん。

レンに対して”変なこと言うなよ?”という視線をアイコンタクトで投げると、
わかつている、と言わんばかりにうなずく。

よし、これでもう大丈夫——。

「——初めまして。私は、カネツグの嫁のレン。」

空気が死んだ



リア大陸に存在するもう一つの世界。

”魔界”

そこを収めるのは魔人。

そして、魔人たちの王、魔王。

魔王が鎮座するは魔王城にて、

支配者たる人物、6代目魔王、シャーリー・エリザベスは憂鬱なため息を漏らしながら、

寝室のベッドで横になっていた。

終わることのない魔人たちの権力争い。

衝突、そして戦争。

人間たちを相手にどういうスタンスで接するべきか、

戦うべきか、協定を結ぶべきか。

そうしたことを先に決めるべきだというのに、

魔人たちは力を求めて、争いことばかりを起こし、

話が進まない。

こんこん、とドアがノックされ、

それまで寝転がっていた彼女は黒の髪をたなびかせ、

入れ、と一言告げた。

「失礼いたします。」

黒の鎧を全身にまとった漆黒の騎士が、

部屋の中に入った。

「貴様か。」黒騎士」。

「は。．．定期報告となります。」

「そうか。」

定期報告。

彼女は部下たちに魔人や、人間たちの動向を探らせていた。

誰も信用せず、誰も頼らない彼女にとっては、

当然と言えるやり口である。

「魔人たちはいつもどおり、領土拡張のため、争っております。」

．．．”魔導王”と”剣鬼”が衝突し、相打ちになり、両者瀕死となったと。」

「．．．あの、馬鹿どもが．．!!」

ぞぞぞ、と彼女、シャーリーの周りに魔力が集中する。

地響きが鳴り響き、部屋が揺れ始めた。

「人間界は変わらず、五大国もこれといった動きはありません。」

「そうか、下がっていいぞ。」

「はっ。」

そう命令された黒騎士は部屋から出ていき、

彼女はまた一人となった。

「.....」

「疲れた」

ぼつり、とつぶやいた彼女は枕に顔を押し当て、

そして壁に向かって枕を思いっきりたたきつけた。

(なんでみんな私の言うこと聞かないのおおおお!!?)

あれ? おかしいぞ? 魔王なのに? あれ? とシャーリーは憤慨する。

力でほかの魔人どもをぶっ倒して、魔王の座に就いたのはいいが、
いかんせん、魔人には脳筋が多すぎた。

——あ、今日から魔王ですか、頑張つてネ

——じゃあ俺たち、殺し合いに行つてきますから

え?

晴れ晴れとした笑顔の魔人たちにそう言われ、
彼女はその時、何が起こったのか理解できなかった。

(なんでええええええ!!?)

そう。彼女はある理由のために魔王になっただけなのである。

いや、正確には、とある人物を確実に手に入れるために。

それがどうしてこうなった? どうしたこうなった!!?!

必死に特訓を積み重ね、レベルは3桁を優に超えた。

幼いころに出会い、今でも連絡を取り続けている、

心の支えとでもいうべき異性を確実に手にされるために。

——だって、権力者とか外堀埋めやすそうじゃん。

(.....カネツグううう.....)

えぐ、えぐ、と彼氏いない歴2x年のシャーリーはしくしくと泣く。

そして、ぴたりと動きを止めて、がばりとベッドから顔をあげる。

(.....そうだ!!カネツグに会いに行つて、さらつてしまえばいいんだ!!)

はたから見ればとち狂ったにしか思えない誘拐の決意。

仕事のストレスによる疲れからか、

彼女はその通常であれば取るはずのない手段を選択してしまう。

「よし。とりあえずまずは人間界に行こうと!!」

仕事？知らね。と言わんばかりに彼女はその日のうちに荷物をまとめて、
魔王城を出た。

目指すは、朱元璋もびつくりの猜疑心を持つ男の元

地雷は積み重なり、連鎖するのさ

事情説明を求められた。

主にあのアホレンのせいだ。

万年つるペタ腹黒幼女許さん。

エマさんにならみつけられながら、

ギルドマスターの部屋にて座る俺とレンとエマさん。

レンはすりすりと体をこすりつけてくるわ、

エマさんはにこにここと笑いながらも、

手に持ったグラスにひびが入っているわ、

マジで生きた心地がしない。

これも誰かの陰謀かと揶揄するが、

そんなことを考えている場合ではなかった。

とりあえず、んー、と口をすぼめて無理やり迫ってくるアホレンを押しつけながら、

エマさんと会話することにした。

「こいつはレン。腐れ縁です。」

「……よろしく。夫がお世話「腐れ縁です」……これが、倦怠期……？」

「へ、へー……そうなんですか……。」

ひくひく、と頬がひきつっているエマさん。

そして、背後には鬼が見えるほどの気迫。

クツソ怖い。

「……婚約の儀を、結んだのに……。」

ぎゅ、と先ほどまでと打って変わり、

瞳孔が開き、牙をむき出しにしながら俺の腕を痛くなるほど掴んでくるレン。

あの集落で、遠くに逃げるまでの時間稼ぎのためとはいえ、

俺はこいつを婚約した形になっている。

しかし、それはあくまでまだ、「婚約」であり、解消は可能だ。

結婚の予約をしただけであり、こいつにもさっさと他のオスをあてがってしまえば問題ない。

知り合いにイケメン、高収入のやつらが何人かいたのでそいつらと酒の席を設けさせて、肉体関係を結ばせれば情が移り、いけるはず。

隣にいるレンの耳元にそつとささやく。

「・・・レン。(俺がこれから紹介するイケメンの)妻になるんなら、黙ってついてこい。」

「・・・!!?」

ぴん、と耳と尻尾が直線状に立ち、顔が赤くなる。

「・・・え?なんだその反応。」

普通は気持ちわる、とか言つて本音を晒す場面だろ・・・?
ま、まあいい。

レンの反応は気にかかったが落ち着かせることはできたので、
これでエマさんと落ち着いて話が――。

「・・・」

――なんか、親指を噛みながらむつちや独り言をつぶやいている。
声がついもの明るい感じではなく、機械的で、冷たい状態である。

出会った時ばかりによく見たモードだ。

このままでは背中にしよつている大剣でぶつたぎられかねないので、

彼女も落ち着かせなければならぬ。

「エマさん。」

「………なんでこんな獣人が??私の方が先だったのに。運命なのに。カネツグ様を愛しているのは、愛されているのは私だけなのに……。よし、クロス。」

あれ?

それまで何やら独り言をつぶやいていた彼女が、すつくと直立に立ち上がり、背中の大剣に手を掛けようとする。

………え?

あれ?え?待つて?なんで抜こうとしてるんですか?

(………ほ、呆けている場合じゃねえ!!!)

隣でいまだに顔を紅くしながら何かつぶやいているレンを振り払い、

エマさんの両腕を掴む。

「離してください!!これは、(カネツグ様と私の愛を)守るために必要なことなんです!!」
「(ギルドの風紀を)守るためなのはわかります!!!けど、さすがに剣を抜くのはまずいですって!!!」

それでも、それなりに鍛えているのか弱い女子位抑えられる。

そんな自負、自尊心も高レベル冒険者でもあるエマさんの膂力により、
粉みじんと化すことも知らずに。

ふわ、という浮遊感がいきなり体を包む。

(・・・え)

二度見した。思わず二度見した。

彼女は、片腕で70kgはある俺の体を持ち上げた。

「カネツグさん!!そ、そんな!!腕を掴むなんて・・・!!(イっちゃいますから)ダメです
ううう!!」

「おわああああ!!」

彼女が落ち着くまで、俺はぶんぶん、とエマさんに文字通り振り回される羽目になる
のだった。



「

「……………おー。疲れてやがんなあ」
「だな。」

酒場にて。

家に帰る前に一杯飲みたくなったので酔ったら顔なじみを発見。
ちようどいいので酔いどれることにした。

疲れた

誰か俺を癒してくれ

「ギルドで人気ナンバーワンのエマさんと、見知らぬ獣人の美少女とで痴話げんかして
たんだって?」

「モテモテじゃねーか!!死ね!!」

「うるせええええ!!てめえが死ねやああ!!」

「ぎゃああああ!!」

いつものからかいも今は受け流す気力もなく、

ブちぎれて嫉妬してきた方の奴にヘッドロックを掛ける。

頸動脈は苦しいだろお!!?あああん??!

「ぎゃ、ぎゃ、ぎゃ……。」

「そこまでにしとけ。」

「……。」

「し、死ぬかと思った……。」

「こっちは頭がいてーんだよ……。糞が……。」

「……まじで重症だな。こりゃ。」

はあ……。とため息が漏れる。

なんか最近色々とおかしい気がする。

昔から俺がためている金を狙ってか、美人局か近づいてくる女は多かったが、

ここ最近さらにはひどい。

さつさと他の男のもとに行けばいいのによ。

……。あ、そういえば手持ち……。

クエストを受けることができなかつたので手持ちが心もとないことを思い出し、
財布を取り出すも、中は空つからだった。

「……おい、お前ら。」

「あー。そろそろ帰つかな……。明日、受けるクエストがあつから、またな。

元氣出せよー。」

「またなー。」

「．．．」
金かしてくれね？

そう言おうと思つた矢先、二人は切り上げてさつきと帰つてしまった。
財布の中を再度見る。

しかし、相変わらず何も無い。

(．．．．．詰んだ??俺の人生、詰んだ!!?)

マズイ。

無銭飲食が発覚したら、信用を失つて、

明日からギルドで仕事をあつせんしてもらえなくなる。

つまり、死ぬ。

シャロからはゴミを見るような目で蔑まれるだろうし、

二度とこの町で表を歩くこともできなくなるだろう。

だからだから、と汗が流れる。

というか、酒場のマスターにぶつ殺されりゆ．．．。

「．．．．．あ、あの。」

どうする?どうする!!?

シャ、シャロに伝えて金を持ってきてもら．．．どうやって???

「ここから出れなきや連絡の取りようがねーじゃねえか!!?
ど、どうする?」

「ど、どうする?」

「最悪、何か金目になりそうなものを人質として置いていつて、
それから金を取りに行かせもらうか・・・?!」

「ああああ!!でも、”日輪”くらいしかねええええ!!?」

「というか金ないのはこれ買ったのが原因じゃねえかああああ!!!」

「質に入れたとレテに知られればレベル70のフィジカルでぼこぼこにされるううう

うう!!!

「・・・あのっ!!!」

「おひよっぶ?!」

「耳元で突然大声で叫ばれ、変な声が漏れてしまう。

「な、なんだ?」

「何が起こった!??」

「きんきんなる左耳を手で押さえながら声のした方を見ると、

そこには、谷間があつた。」

Oh・・・。桃源郷・・・。

「カネツグさん。どうされたんですか?」

「フイ、フイーネちゃんか・・・。」

と思つたら知り合いだった。

子供の頃から知っている子供の体つきに興奮していたことを自覚し、

罪悪感に胃が痛みました。

気まずい・・・。

というか、金がないことがバレたらマズイ。

ここはごまかすことにした。

「な、何でもない!! だいじょうびゆ!!」

「・・・。あの、そうは見えないんですが。」

だよなあああ!!!

俺だつてこんな挙動不審な奴がいたら怪しむわ!!

とりあえず、会話を適当なところで切り上げて・・・。

その時、ぱさりと俺が膝の上に乗せていたそれが落ちてしまった。

「あ。」

「え？」

——中が空っぽの財布が、ふたが開いた状態で地面にぽとりと落下した。

〔幕間〕彼ら、彼女たちから見た、カネツグの評判の1

同業者の冒険者たちの場合

「……あ？カネツグのことが知りたいって？」

「あー。あいつね。……この街で、知らないやつはいないんじゃないかなー。」

新聞の記者に対して、酒場で管を巻いている二人は、

テーブルに持っていたジョッキをどん、と音を立てて起き、

酒臭い息を吐きながら語りだす。

「一言で言うなら、”黒子”だな。」

「ああ。アルバーツ連邦でいうところの”忍者”みたいな感じ？」

「別にこれといって、戦力があるわけでも、顔がいいわけでも特になんだけど……。」

片方の男は腕を組み、もう片方は顎に手をやり、

すりすりと擦る。

「なんというか、”パーティー”や”組織”には絶対欲しくなる人材だな。」

「悪く言えば器用貧乏、良く言えば、器用万能ってところか？」

途中、桃髪色のツインテールヘアの美少女とすれ違い、ぶつかりそうになるも、体をスツと横にずらして躲す。

「お!!? ファイーネちゃんじゃねえか!!」

「我らの女神さまのご出勤だあああ!!」

「や、やめてください……。はずかしいですう……。」

彼女が酒場に入った途端、わっとそれまで以上の盛り上がりを見せる。

どうやら、ここで人気の人物らしい。

……そういえば、彼女の顔を昔、どこかで見たことがあるような気もするが……。

まあ、気のせいだろう。

喧騒冷めぬまま、酒場を後にするのだった。



彼に昔助けられた人の場合（匿名Eさん）

「あの人、ですか？」

「はい。この街に来た時から、ずっとお世話になっていきます。」

「まだ、ただの子供だった私に、生きる術を教えてくださいました人です。」

「彼よりも強い人はいます。」

「彼よりも賢い人もいます。」

「彼よりも裕福な人もいます。」

「でも、カネツグ様以上に、私を助けて、救ってくださった方はいません。」

「ただのみすぼらしい子供だった私を、見捨てず、結局のところ独り立ちするまでずっとずっと、カネツグ様は守ってくださいましたんです。」

「そんなことができますか？」

「自分の食事さえ、まともに食べられていない状況で、他の人に施すなど。」

「だから、他の誰がカネツグ様のことを笑おうと。」

「あざけり、レベル1の弱者と罵ろうとも。」

「私は、……私だけがあの方の味方なのです。」

「一番なのです。」

「伴侶なのです。妻なのです。母なのです。半身なのです。」

「離れてはならない、月と太陽なのです。夫婦なのです。」

【以下、匿名Eさんが発狂し始めたため、検閲】

◆ とあるロイヤルな冒険者の場合（E様）

「カネツグ様のことですか?!」

「はい!!よく知っております!!」

「ええ!!ええ!!あなたはわかっておりますね!!」

「ギルドのランクがいまだにカツパーで、低くても!!」

「レベルが1からあがらなくても!!」

「そんなの関係ありません!!」

「今でも私は覚えております!!」

「男どもに乱暴をされそうになった私を、身を挺して庇ってくださいったあの方の背中を!!」

「冒険者になったのも、カネツグ様を追ったことです!!」

「彼はほかの男とは違う!!違うんです!!」

「体目当てで甘い言葉を投げかけてくることもなく、

セクハラをしてくることもない!!」

「聞いたところによると、15年間もレベルがあがらなくつても、

仕事に取り組み続けているという熱意!!」

「ああ・・・!!全くもって素晴らしいです・・・!!」

【以下、数時間ほど同じような話のループ】



???の場合

『・・・死ぬはずだった。』

『勇者に討たれ、血を流し、倒れる私。』

『自分の体から流れる血を見て、思った。』

『”ああ、死ぬんだ”と。』

『だから、諦めていた。』

『永い生に・・・疲れてもいたから。』

『・・・そんな時。』

『彼が、やってきた。』

『・・・やってきたの。』

『白馬の王子様。』

『・・・そんなかつこいいものでもないけど。』

『ウオルフに喰われるところを、あの人は。』

『レベル1で戦えるはずもないのに、あの人は。』

『・・・助けて、くれた。』

『震える手で、剣を必死に振るって。』

『ウオルフの牙や爪で、体のあちこちを傷つけられても。』

『絶対に私を見捨てることはせず。』

『・・・助けてくれたの。』

『ウオルフの返り血と、自分の体から流れる血が合わさって、

真つ赤なトマトみたいに全身を汚しながらも。』

『振り返って。』

『・・・私をお姫様抱っこしてくれたの。』

『その時思ったの。』

『・・・ああ。』

『欲しい。』

『こんな弱くて、脆くて、不細工で、情けないこの人が。』

『・・・ずっとずっと、私だけのものになればって。』

「……うん。……好き。」

「……好き。」

「……大好き……。」

「死んでもいい……。」

「カネツグと一緒に、心の中したいくらい……。」



「とある学園にて」

「……。」

「?ルビー?何を見てるの?」

「いや、なあに。留学生制度で他校に行った知り合いがな。」

「記事の文章にするといつて送ってきた草案をな。」

「えーと、何々……。」

「……」ギルドの超ベテラン冒険者、カネツグの噂「……?」

彼女が見せてくれた記事には、どうしてかひどく親近感を覚える青年が写った写真と、彼の評判を記載した文章が書かれていた。

そして、彼の真横に並べられている、目隠しされているがどうもヤヴァイ気配のする

「……一緒に風呂に入りながら、愛せるようにな♡♡」

「は??？」

「ずるずる、と彼女にベッドまで引きずられながら思う。」

——自分、どこで選択肢を間違えたんだっけな……。

自分と同じような雰囲気にするカネツグという人物に、
十字を切った。せめて、俺と同じ境遇の人が減りますように、と。

——「一晩中、ルビーと、そして途中から乱入してきた他の女性たちに食られるの
だった。」

女子からお金を借りるといふのは、男にとって、これ以上なく情けなく感じることです（〇）キニシナクテモイイン
デスヨ？（ねつとり）く

問題です。

所持金0のまま、怖いマスターがいる酒場で無銭飲食をしてしまった俺は、
一体この後どうなるでしょう？

A. シャロが金を持ってきてくれるが、

この後、めちやくちや罵詈雑言を浴びせられ、
精神的に死ぬ

B. ツケで何とかできるも、割増料金で、
借金せざるを得なくなる

C. 助けは来ない。死ぬ

明るい未来が全く思い浮かばず、

体から血の気がサーと引いていく。

気のせいか、ぼたりと自分の頬から汗が滴り、

テーブルの上に落ちた。

(あばばばあ a b a b a b a b a b a)

このマスターには昔お世話になって、

どうしても頭が上がらない。

しかも、不義理、犯罪を絶対に許さない人だ。

前に、飲食代を踏み倒そうとしたチンピラ数名を、

目の前で顔が腫れ上がるまで殴り、

路上に討ち捨てたところを見たことがある。

常々、この人だけは怒らせたらまずいと

思っているのに。

中身の無い財布を落としたばかりか、

それをフイーネちゃんに見られてしまった。

すつ、と身の中腰にかがめ、

俺のすつからかんの財布を拾う彼女。

(終わった……)

・・・せめて・・・死ぬなら腹いっぱい高級品食べてから死にたかった・・・。
両手で顔を覆う。

こんなことならもつと金を持ち歩いていたほうがよかった、
と震えていると、ぽすり、と重さを感じさせる音を立てて、
俺の財布がテーブルの上に置かれた。

(……え?)

しかし、しかしだ。

中身は入っていないはず。

そーつと両手で黒革の財布を開いてみると、

そこには、俺が食べた食事分の硬貨が入っていた。

はっと彼女のほうを振り返ると、

片眼をウィンクして、にこりと微笑んできた。

(ファイ、フィーネちゃああああああん!!!)

なんとという天使。

なんとという女神。

昔から優しい子であることは知っていたが、

マジでいい子過ぎる。

ヤバい、ロリコンじゃないけどくらつといきそうである。

というか、もう半分落ちたわ、これ。

フィーネ大明神の前で小さく両手で合掌し、

何度も何度も、頭を小刻みに下げ、拝み倒す。

(ありがとうございます!!ありがとうございます!!)

・・・これで、マスターとシャロに殺されなくて済みます!!!)

(えへへ・・・)。次からは、気を付けてくださいいね?)

すれ違う瞬間、耳元で彼女が優しくそうささやき、次来るときは、もつと高いもん頼んで、彼女の給料に貢献しようと考えてるのだった。



これはチャンスだ。

そう、チャンス。

カネツグの財布の中身を偶然覗き見た私が最初に考えたのは、まず、それだった。

(顔が一目見てわかるほど、血の気が引いていつている。

・・・ああ、可愛そうに・・・)

私が癒してあげたあい・・・♡)

思わず、抱き着きそうになるのをぐつと体に力を入れてこらえ、次に、思考を張り巡らせる。

(おそらく、本当に今、手持ちがない可能性が高い。

・・・ほかにお金を持っているなら、こんなに慌てないはず。)

何百、何千とカネツグの表情を観察し、

一目見ただけで何を考えているかわかるようになったフィーネは、舌でちろりと唇を舐め、熱く息を漏らす。

(・・・駄目ね。これだけじゃカネツグ様の人生をもらうには、全くカードととして足りない。・・・ここは、恩を売って、

心証を良くする方が合理的。)

身をかがめて、彼の財布を右手で拾う。

もちろん、胸がちやんと揺れて、彼が興奮するようわざとゆつくり感じる。

みだらな視線を。

他の男ならともかく、それをしてくれているのは、彼だ。

(んんう・・・だめえっ・・・♡)

ぶるり、と軽く達してしまった。

ああ、これ以上は限界だ。

本当に名残惜しい。

残念だ。

もつと視姦されていたし、

何なら今すぐ、二人でベッドでくんずほぐれつなんていい……。

でも、それをするには、現状まだ早すぎた。

くちゆり、と下着が湿った音を立てたのを感じる。

(もどかしい……♡♡ああ……カネツグ様あ……♡♡)

震える右手で、自分のポケットから硬貨をそつと取り出し、

彼の財布の中に入れておく。

この場はまだ、まだ。

まだお預け。そう、オアズケ。

テーブルの上に置き、ぼそりとささやく。

彼が一番気楽でいられる言葉を。

……メスの匂いが彼からほのかにする。

(.....)

それまで感じていた幸福感がすー、と後を引き、
完全に消えていく。

(.....さない。)

にここに、と笑顔を酒場の客に振りまくことを忘れないようにしながら、
体の中に渦巻く情念を抑える。

(.....許さない.....)

彼に触れていいのは私だけだ。

私に触れていいのは彼だけだ。

勘違いしている輩が多すぎる。

さつさと、彼を保護しなければ.....

しかし、今はまだ、まだ我慢だ。

(・・・うふふふふ・・・♡♡カネツグ様あ・・・♡♡)

とある光景を頭の中に浮かべる。

小さな教会。

タキシードと、ウエディングドレスをそれぞれ着用し、

愛の言葉を紡ぐ私たち。

子供が生まれた。

女の子と男の子だ。

彼は、私が無事に子供を産めたことを、

心から喜んでくれている。

時は過ぎ、子供たちが学校に行くようになった。

これで、カネツグ様との時間が増える。

ほぼ、二人つきりだ。

ベッドに生き、彼とまぐわう。

場面がまた変わる。

子供たちが独り立ちし、

家を出ていった。

少しだけ寂しいが、

私とカネツグ様だけとなった。

さあ、お祝いだ。

少なくとも1か月間は彼を家から出さず、

保護しないと。

目いっぱいマーキングしておくのだ。

頭の中を、幸せな情景が駆け巡っていく。

何度も何度も。

結ばれて、二人が死んで墓の中に行く場面を、

何度もループさせ続ける。

魔力で加速させた思考ならば、1日に1度、

カネツグ様と一生を過ごす疑似体験ができる。

(
．．．ふふふふ．．．♡♡．．．待ち遠しいなあ．．．♡♡)
(

今日も私は外堀を掘り続ける。

いづれ必ず来る、幸せな未来を確信して。

クール爆乳無表情ヤンデレメイド、シャロの一日くお前・・・お前・・・(畏怖)く

——私の朝は早い。

ご主人様が目を覚ます1時間前にはいつものメイド服を着て、すでに家の前を箒で掃いて掃除している。

・・・ふむ。これならご主人様があるくにふさわしい道です。

花に水をやり、朝食を火魔法で焼いて作っていると、

ようやくねぼすけが目を覚ます。

「…………おはよう。シャロ。……あああ、まだねみ…………。」

「…………おはようございます。ご主人様。

いつにもましてさえない顔ですね。」

「ほっとけ!!」

「つたくよー、と悪態をつきながらも、

私の箸が置いてある場所の隣に座るカネツグ様。

…………いい。」

今日も朝からご主人様のお顔を見ることができた。
ペロペロしたい。というか、合体したい。

交尾して、○○して、××して、△△して……。

「……おい？ シャロ？ 聞いてんのか？」

はっ、とトリツプ仕掛けていた自分自身に喝を入れるため、
尻尾で自分のお尻を叩く。

いけない。まだ、トリツプするのは早い。

睡眠薬を夜に仕込んでからが本番だ。

「なんででしょうか？ 稼ぎも少ない癖に、

いまだに私を雇い続けている偏屈者のカネツグ様。」

「……うるせえ。お前がいなくなったら、

誰が俺の面倒みるんだっつーの。」

……ああああああああ。

ああああああああああああああああああああ

ああ

．．．．．そばに、ずっとそばにいてくれるのか。

(．．．．．好き。)

私の胸の中は、その感情ですぐにいつぱいになってしまおう。
ずるい。

ずるいずるいずるい。

貴方を愛しているのに。

どうして、貴方はそんなにそっけなく、恥ずかしげもなくいられるのか。
こんなに恥ずかしいのに。体が熱いのに。

——心が、震えているのに。

体の表面に浮かび上がった龍の鱗。

それを必死に理性で抑える。

龍化してしまえば、最後だ。

「．．．．．飯、ごっそさん．．．相変わらず、腕はいいんだよな。

．．．．．これで、口のほうもよければなあ。」

「．．．．．!!!．．．メイドです。あくまで仕事です。」

「へいへい。それじゃあ、俺はそろそろ仕事に行ってくるわ。」

「あつ。」

「ん?」

いつもの麻袋を右肩にかついで、家のドアに右手を伸ばす彼に、私は声を漏らしてしまう。

——言うのです。

今日こそ、今日という日こそ、シャロ。

貴方は悠久の時を生きたエンシエント・ドラゴン。

——行ってらっしゃいと、言うのです・・・!!!

「あつ、その」

「・・・ああ。ちゃんとお前の給与はギルドに払っておくから安心しろ。じゃな。」

「あつ・・・。」

手を振って、あの人は出かけてしまった。

(・・)

また、言えなかった。・・・・あ、カネツグ様が使っていたナイフとフォーク。・・・・

おいしい・・・・。)



メイドの一日は長い。

私にはやることがたくさんある。

カネツグ様に媚びを売る女を排除したり

カネツグ様を尾行したり

カネツグ様に払われる報酬金を増やすため、ギルド長に”お願い”をしたり

カネツグ様が昼食で使った食器を回収し、コレクションに加えたり

カネツグ様を傷つけたモンスターを圧殺したり

そうして迎えた夕方。

モンスターを討伐して、ぼろぼろになった体をひきずり、

ギルドに戻るカネツグ様の後姿を見る。

．．．はあああ．．．。

思わずイってしまった。

なんだあの後姿は。

好き。

襲ってくれと言わんばかりの無防備ではないでしょうか。

好き。

……私に命じてくれば、世界だって滅ぼして見せるのに……。

彼は、よくも悪くも私を一人の完璧すぎるほど有能なメイドとしか見ていない。

……それが、悔しくもあり、嬉しくもある。

ふらふら、と彼が歩きたび、待ちゆく人々が彼に声をかける。

「カネツググー!!新しいポジション原価で売ってやつからまた来いよ!!」

「カネツグさん!!この前のクエストではお世話になりました!!ありがとうございます

!!」

「カネツグ様!!父と母が晩餐会に招待したいと言っておりました……。」

最後のやつは許さない。

絶対に。

◆ 夜。

疲れた彼と一緒に夕飯を摂りました。

なんだかんだ言いながらも、私の料理を毎回完食してくださるとは、全く、プロポーズをそう何度もしないでほしいものです。

私たちは、すでに夫婦なのですから。

「くあああ……。ねる。おやすみー。」

「はい。おやすみなさい。」

そう言って、自室に戻る彼を見送る。

十分ほどして、彼の部屋のドアをそーっと開ける。

すう、すう、と寝息を立てながら彼がベッドで

横たわっているのが見える。

「……我慢の、限界、です……。♡」

うっとおしい衣服をすべて脱ぎ捨て、裸になる。

ああ

ああああ

ああああああああああ

ああ あ ア あ あ

我慢した

我慢しました

いっぱいいっぱい今日も我慢しました

貴方を襲わないように

貴方を傷つけないように

貴方が寝るまで、ちゃんと私、” 待て ” ができました

だから、もう、イイデスヨネ・・・

「なんか、体がだるいんだよなあ」

「・・・気のせいでしょう。」

よく朝、あくびをこらえながらうつらうつらと頭を揺らしながら、

考え事をする彼の顔を見て、今日は昨日の3倍愛し合おうと

思うのでした

いい夢を見ていました（震え声）
く水面下の競争く

（あー．．だり。）

重く、鉛のように動きの遅い体。

足を交互に動かし、地をけって進む。

だが、力はあまり出ない。

先日実施した害獣駆除のクエストにて、

体力を消耗したためである。

すでにおっさんの自分には、

何かと体力が削られやすい。

シヤロも今回ばかりは俺を気遣ってか、

悪態をつくこともなかった。

いつもの木製の扉を開き、中に入ると、

耳に人々の喧騒の音が聴こえてきた。

すでに依頼を受けるために、

受付には長蛇の列ができていた。

掲示板のほうに貼られている張り紙も、

そんなに数はなかった。

(出遅れちまったか。しゃあない、何か適当なもんでも・・・ん?)

余り物の依頼を見ようと、張り紙に目を通す。

『——ギルドからの公式依頼：冒険者を目指すものへの教導をお願いしたく存じます。募集資格としては、犯罪歴無し、ギルドから10年以上仕事を受け続け、300件以上のクエストを成功させた方のみとなります。報酬金は金貨100枚＋出来高制となります。』

「……………」

——もう一度目を通す。

ああ、確かにそれは幻じゃあない。

美味しい仕事だと言える。

金貨100枚と言えば、100万円相当だ。

これだけあれば、3、4か月は働かなくても大丈夫だ。

しかし、どうも募集資格がシビアすぎる気がする。確かに金貨100枚なら大金だと思うが、

10年以上もギルドからの依頼をこなしていけば、毎月数百枚は稼げるはずだ。

レベルでいえば、20あたりが一流のラインである。

Cランクモンスターを倒せば、一体につき金貨数十枚。一流の冒険者ならば倒せる。

それを考えると、いつまで拘束されるかもわからない、こんなクエストに行くはずもない。

そう、俺みたいなレベル1で、ずつとうだつのあがらないやつでもない限りは――。

「……………」

すぐ隣にある、葉草集めについての張り紙を手に取り、受付まで向かうのだった。



（…………ああああ!!なんで?!?!なんでそっちなんですかああああ!!?!）

ギルドの受付嬢こと、”百花繚乱” エマは意中の人物の行動に、内心叫びっぱなしであった。

「エマさん。このクエスト受けるので、同意書を。」

「はい。」

それでも、笑顔を崩さないあたり、彼女は本物のプロであった。

心のうちは、平静どころか嵐真つただ中だが。

(もー!!!そのクエスト、貴方のために取ってきたんですよ!!)

早くそのクエスト受けて、たくさんお金稼いじやってくださいよ!!)

「こちらが同意書です。」

「どうも。」

彼が同意書に目を落とした瞬間、エマは何とも言えない、

ぐぬぬぬ、というちよつと悔しそうに唇をかみながら、

苦悶の表情を浮かべる。

彼女は、カネツグしかできないような仕事をわざわざ作り、

高報酬の依頼を取ってきたのだった。

「それじゃあ、行ってきます。」

「はい、行ってらっしゃい。」

（あああああ!!カネツグ様あああ!!そんなところも大好きでええええす!!!）

カネツグのある意味ブレなさに、股をぐっしよりと濡らしながら、

彼女は妻として見送るのだった。



「ああ。こいつだな。」

「・・・・・・・・。」

「えーと、次はこいつと。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・おい。」

「・・・・・・・・。」

むふー、と鼻息を荒くし、中腰で薬草を採取するカネツグの背中に抱き着く少女。

紫色のストレートに降ろされた長髪。

目は紅く、服装は黒色のゴスロリ。

まず、間違いなく美少女である少女、いや、モンスター。

アリスは彼の背中に抱き着き、ふんす、ふんすと堪能をしていた。

「仕事中だ、引つ付くんじゃねえよ。」

「……ちよつとくらい。」

「おら、どけ。」

アリスの上目遣いも気にせず、彼女の首根つこをつかんだカネツグは、近くにあつた木にぽい、と捨てた。

そして、すぐまた薬草探しに戻る。

アリスは、そんな彼の背中をじつと見つめている。

「……お、あつたあつた。良かった。」

季節的にはあんま摂れない時期だと思つたが……ついてるぜ。」

「……ねえ。」

「……ああ?」

仕事の邪魔を再びされ、眉間に眉を寄せながら、

彼はアリスのほうを向いた。

「そんなちまちまとした仕事をカネツグがする必要ない。」

……私が、ドラゴンでもなんでも殺して、

それを売れば問題ない。」

「……。」

そう無い胸を張って断言するアリスを、

はあ、とため息をついて視線を切った彼は、

再び薬草を袋に詰め始めた。

「……ねえ。」

「……おらっ」

「あうっ」

しつこいアリスの元まで歩き、

頭にチョップが振り下ろされた。

痛くはないが、突然の出来事に彼女は目を丸くしてきよとんとした顔をする。

「バーカ。俺は俺の力で何とかする。」

ガキがマセたことを言ってるんじゃねーよ。」

「……私と一緒にいれば、何でもあげる。お金も、

名声も、力も、何でも……。」

「お前からもらいたいと思うものなんてねーよ。」

（ガキだしな）」

「……!!」

（え？なんでこいつこんな驚いた顔してんだ???)

笑顔のカネツグの顔を見やる。

「腹減ってんだろ？ 食え。．．．薬草は集め終わった。

後は、ゆっくり寝て、ぐーたらすつか。

．．．あー、疲れた。」

「．．．．．。」

彼女は、美少女だ。

その上、クイーン・ヴァンパイアという、

化け物の中の化け物である。

どのような怪物も、彼女の前では赤子同然。

ゆえに、カネツグもその気になれば即死される。

舐めた態度をとった弱小生物を強者が生かす道理はない。

———しかし

「．．．．カネツグ。腕枕して。」

「ああ?! ．．．ち、しよーがねーな。．．．おらよ。」

彼女は甘えることにした。

肉体関係を夜な夜な持つことにより、精神的なつながりを強めていたが、それだけでなく、更に責めることにしたのだ。

(・・・やっぱり、貴方はバカ。・・・バカ。

・・・そんなところが好き。・・・好き。大好き・・・。
ずつとずつと、一緒にいようね・・・。)

かくして、今日も彼は命拾いする。

虎と、クマと、狼と、鷹と、蛇と、猪に狙われた獲物のような立ち位置ではあるが、奇跡的に今は「まだ」、平穩を保っているのだった。

「……!!? コウモリ風情が、私だけのご主人様とイチャイチャしているような気がする……!!」

とある一幕、彼がもし怪我をした場合、その1

「いってえ……。」

「わず、と痛む足を引きずりながら、

獲物を右手に街へ進む。

「害獣駆除のクエストで、獲物を狩ることに成功したものの、

後ろに回り込んでいた別モンスターの攻撃があたり、

痛手を負ってしまった。

幸いにして、歩くことができるだけマシだが、

これでは明日の仕事はままならないだろう。

左手で血のにじむ腹を抑え、

吐き気をこらえつつ、帰路を進む。

稼ぎが少なくなつて、家に帰ったらシャロにいやみの一つでも

言われるだろうな、と想像したらため息が漏れた。



「・・・おい、聞いたか？」

「ああ。・・・あのカネツグがな。」

カネツグが暮らしているのは、人口10万人程度の街。
決して少なくはないその街にて、人々はとある噂に没頭している。

——王城にて。

「——姫!! いけません!! 今夜は殿下と同盟国との会談があるので!!」

「どきなさい!!! カネツグ様以上に大切なものなどありません!!!」

——カネツグ様ああああ!! 今、貴方のエルが向かいますわああああ!!
とある暴走特急が、とあるしががない冒険者のもとに向かおうとしていたり。

——とある富豪の商会にて。

「マリー。彼がもつといい場所で休めるよう、手を回しておいた。」

——あとは、わかるね？」

「はい!!!孫を必ずお見せいたします!!!」

命を救われた両親と、子を産む気満々な娘の豪商タッグが
良からぬことを企んでいたり。

——とある鍛冶場にて。

「おーい。レテ。王宮から儀礼用剣の発注が……。」

「……カネツグ……カネツグ……。アタシが今、最高の防具を作ってやるから
な……。お前が二度と傷つかないように、一生アタシの防具で包み込んでやるから
な……。へ……へ……へ……。」

「(……亡くなった家の嫁そっくりになってやがる……。)

不眠不休で、最恐の防具を作ろうと、

ハイライトの消えた笑みで、世界最高の鍛冶師が重すぎる愛を胸にくすぶらせていた
り。

——ギルドにて。

「はい。それでは、そのように……。ああ、カネツグさんが入っている保険

から彼の口座に保険金を入金するのも忘れずに。．．．それから、私の伝手で腕のいい治療師を呼んであります。．．．いえ、別にそういう関係では．．．。

．．．夫婦になれたらうれしいのですが．．．。．．．ありがとうございます。

その際は、ご招待いたしますね？」

カネツグの収入が減らないよう手回ししつつ、ちやつかりと外堀を埋めている受付嬢がいたり。

——とあるモンスターの集落にて。

「それじゃ、気をつけていってくるんじゃぞ。」

「お兄ちゃんによろしくー」「いいなー。私も行きたいーい。」

「．．．みんなの分も含めて、お見舞いしてくるから大丈夫。」

「お姉ちゃん。お兄ちゃん欲しいから私にちょうだい。」

「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

モンスターなのに、どこから噂を聞きつけたのか、

人間の街に行つて、とある人物の看護をしようとしている少女がいたり。

たかだが一人の冒険者が一時的に離脱しただけで、

街中に衝撃が走つた。

「……………」

◆
結局のところ、全治1か月。

より詳しく言うと、もつと早く治るだろうが、
経過観察を兼ねての日数だった。

街のとある静かな区画にある療養所にて、

俺はベッドでごろごろとしていた。

やることなく、本を読むくらいしかない。

時たま、誰かの視線を感じることはあるものの、

しかし誰も見当たらないので気のせいだと片付けた。

仕方ないから、つけた記録を振り返ろうと

羊皮紙の巻物を広げていると、

こんこん、とドアがノックされる音が響く。

「……………はい？」

『カネツグ様。私です。』

きい、とドアが開けられると、

その先には見知った顔があった。

「・・・シヤロ?」

「・・・。。。」

いつもの能面を思わせる無表情。

銀色に輝く長髪を横でサイドテールにくくり、

碧く光る瞳をこちらに向けてくる、

なぜか、背中に寒気を感じる。

療養するから、暇を出していたはずだが・・・。

というか、なぜこの場所を知っているのか。

「・・・ご主人様。お昼です。」

そういつて彼女が手渡してきたのは、

作った料理が入っているバスケットである。

というか、社畜じゃあるまいし、

わざわざ俺のために届けに来たのか・・・と

顔が引きつるのを感じつつ、

お、おう・・・とこぼして受け取る。

「俺、お前に休みだしたよな・・・?」

「・・・とりあえず、入院中は

ずぼらでのーたりんなご主人様ではまともな生活は難しいでしょうから、私がすべてお世話いたします。」

「おう、こつちむげや・・・!」

目をあわせないよう、横を向きながらしれつと

ここに居座る宣言する駄メイドの両頬を手でつかみ、

ぐぐぐ、とこちらに向きなおさせる。

「金がかかるから休職してろつたつたろうが!!!」

「・・・・・・・・・・私に乱暴する気ですか？」

「・・・・・・・・・・まだ日が高いですよ?」

「話反らしてゴマかしてんじやねええええ!!!」

結局、その日一日はシャロがひつついてきて、

休養どころではなかった。

寓話～元駆け出しだったAランクパーティーたちの話

その1

冒険者の頂点、Aランク。

そしてそのAランクだけで構成されたパーティーは、人々にとつての憧れである。

——現在あるAランクパーティーの7割がとある人物がきっかけで生まれたことを、

本人も含めて、殆どの者は知らない。

知る由もない。

それは、今よりも昔のこと。

時間にして、彼が冒険者生活10年目に差し掛かったところのことである。



私たちは、一つの問題に直面していた。

「そんな……!? 約束は、100万リアだって……!!」
「知らねえな。」

「嬢ちゃん、桁を一個見間違えていたみたいだなあ?」

ぎやはははは、と下品な笑い方をするごろつきと、

その中心で踏ん反りかえる、カイゼル髭の中年。

名をファルバム・シユタラスという商人だ。

ぎり、と握りこぶしを振るおうとする腕を寸でのところで抑え、
思いとどまる。

「……借金には、利子というものがある。……君たちは、
それを返さなければならんのだよ。」

「だからって……!! こんな……!! 法外な利子……!!」
「違法とでも言うのかね? ……ああ、独り言だが、

信用も、後ろ盾もない相手には相応の利子をつけている。

——君たちにはびつたりの査定ではないのかな?」

「!!」

「——レイ、だめっ!!」

私がおか言うよりも、先に、レイが剣に手を伸ばし、

斬りかかろうとしたのを、その隣にいたアンジェラが必死に止める。

「だって……!!こんな……!!こんな……!!」

「……一週間。君たちに猶予をくれてやろう。」

……その間にもう100万リア持つてきたまえ。そうすれば君たちから預かった装備は返してやろう。」

——男の言葉を受けて、目の前が真っ暗になった。



「——ふへえ。」

「ありがとうございます。」

「ああ。いいってこつてすよ。」

「兄ちゃん、兄ちゃん。次はいつ来てくれんだ?」

「あ?……まあ、仕事があつたらな。」

俺の言葉にえー、と残念そうな声をあげるガキども。

全く、孤児院からの仕事は確実な報酬をもらえるのだが、子供たちが元氣すぎて少し疲れちまう。

とはいっても、収入源が多いに越したことはないし、こうして依頼人との縁が切れぬよう、

多少のことには目をつむって依頼を受け続けている。

最初のころはあまり信用されておらず、警戒されていたが、ここ数年、定期的に仕事を受けていくうちに、

互いに信頼関係を築き上げることができた。

どつかりと、コテージ近くにある気の丸椅子に座りながら、庭で駆け回る子供たちを眺めていると、

隣にふわり、と心地よいにおいが沸き立つ。

「ふふふ。子供たちが気になりますか？」

「．．あー。まあ、子供は嫌いじゃないですし．．．」

隣にちらりと視線を配ると、俺のクライアントがそこにいた。いつもにこにここと柔らかな笑みを浮かべており、

俺の中でここに来る理由の半分となっている人である。

腰まで長くのばされた茶色の髪は先つぼのほうでひもでくくられており、その顔立ちは、10人が見れば10人が美人と答える顔立ち。

目は金色に光っており、見るものを魅了するグラマラスな体つき。

胸はメロンほどの大きさと、尻も大きい……って俺は誰に対して言ってるんだか。

「……カネツグさん？」

「あ、いや、何でもないですよ、アリシアさん。」

ずい、と身を寄せてきたアリシアさんから、近づいてきた分だけ、そっと距離を取りつつ、慌てて取り繕う。

緑色のローブに身を包んでおり、

布面積が多くて健全なはずなのに、

体つきが浮き出て逆にたまらんことになってしまっている。

「——いつも、ありがとうございますね。」

「……金のためですよ。」

「そうですか。」

「そうです。」

いつもの通りと言わんばかりに、

俺たちは決まりきったやり取りをまた重ねる。

それに対する答えも変わらず、

いつもの通りに答える。

二人で、子供たちが遊んでいるのを一緒に眺めながら、

物思いにふけていると、彼女がふ、と嬉しそうに言う。

「——あなたが来ると、いつも子供たちが楽しそうなんです。

……身寄りのないあの子たちにとつて、私が母親代わりになれますが、
父親の変わりはできませんから……。」

「……………」

ここにいる子供たちはみな、訳アリだ。

なんでここに来ることになったのか？

それを聴くことはタブーでもある。

——あまり、愉快じゃない理由を昔、アリシアさんから聞いて以来、

突っ込まないようにしていた。

「……………あと、その、ですね……………」

「あ、はい。」

また、ぼうっと景色を眺めていると、

隣のアリシアさんが、もじ、もじ、と身をくねらせる。

「……………私も、嬉しい、です……………」

「……………そうですか。」

子供たちが元気になって、嬉しいということだろう。

きつと彼女にとって、あの子供たちは本当の息子、娘なんだ。

——— 少しでも、万年Eランクの俺が、

何かの役に立っていると感じて、誇れるように思えた。



「……………!!」

「……………?」

「……………ああ、彼らですか?」

「……………何かあったんですか?」

孤児院での仕事を終えて、報酬を受け取りにギルドにやってきて、

受付の人と会話していたところ。

騒がしく、少し大きな声で話している3人組の冒険者らしき集団がいた。

「何か、あつたんですか？」

「——他の人には内緒なんですけれども……。」

すすす、と俺の耳元でささやくお姉さん。

「——どうも、借金が返せないから、

夜の街に立つ、立たないつてもめているみたいでして……。」

「……ああ……。」

冒険者に限らずよくあることだが、

金を稼げず、女がそうした職業につくのは不思議なことじゃない。

見たところ、あの3人組もそうなのだろう。

見た目はかなり整っているから、

なればすぐに金を稼げるようになれそうだが、

さすがにそれを同じ女性である受付のお姉さんの前で

言うつもりはなかった。

「なるなら、さっさとなつちやえばいいと思うんですけどね。」

……信用も、実績も、実力もない冒険者は害虫ですから。

「……あ、カネツグさんはもちろん違いますよ!？」

「……そ、そうですか……。」

ストレートな罵倒にちよつと身を引きつつも、

女つてやつはこれだから……とため息を漏らす。

「はい、こちらが報酬となります。」

「……カネツグさん、いつもありがとうございますね？」

「……あなたがいるから、救われている人もたくさんいるんです。」

「……そーすか。」

社交辞令を受け取り、報酬の入った金貨の袋をじやらじやらと鳴らし、

中を開いて、一枚一枚数える。

「……いつもより、枚数多くないですか?」

「……どうやら、多少の色をつけてくださったみたいでして。」

「……。」

アリシアさんもお人よし過ぎる。

俺がもし、悪人だったらころつと騙されてしまふんじゃないだろうか。

まあ、そこがあの人といいところでもあるんだが。

そうしてじやらじやらと数えていると、

後ろからいきなり誰かに抱き着かれ、うぐ、と声漏れる。

「カネツグー!! お金入ったんだな!! あたしの剣、買えよ!!」

「だああああ!! ひつつくくんじゃねえええ!! うつとおしい!!」

ちっこい体で俺の背中にしがみついてきたのかと思うと、

すぐさまよじ登り、勝手に俺の肩に両足を乗せ、定位置と言わんばかりに凶々しく居

座る襲撃者。

「レテ!! 重いから降りろつつってんだろぅが!!」

「なっ．．あ、あたしは重くないし!! ほら!! 見ろよ!!」

それは胸と尻がおつきなくなったからであって．．．．」

「わー!! バカバカ!! こんなところで脱ごうとするんじゃねえええ!!」

驚いてレテのほうを見ると、すでに脱いでおり、上半身はさらしだけになっていた。

——ん? なんか背中に寒気が．．．。

「．．．．．」

「あ」

「あ」

後ろを振り返ると、そこには笑顔だが、目の笑っていないお姉さんが立っていた。

——結局、レテのバカのせいでギルドのお姉さんにお叱りを受けることになるの

だった。

「……………あの人。」



「……………おい痴女。」

「……………なにさ。」

ぶすー、と不貞腐れるレテをおんぶしつつ、
街を歩く。

こいつの自業自得だというのに、
何を怒っているんだか。

「お前がアホなのはしっていたが、あそこまでアホだとは知らなかったわ。」

「アホっていうほうがアホなんだぞう!!!」

「はいはい。レテちゃんはいえらいでちゅねー。」

「子ども扱いすんなー!!」

うがー、と怒るレテをいなしつつ、

今日の夕食のもとになる材料を買っていく。

・・・こうしていると、なんか主婦みたいだな、俺。

レテみたいな子供は絶対に御免だが。

「それで・・・ん？」

「・・・。」

す、と目を細めてレテがぼそぼそ、と俺にだけ聴こえる声でしゃべりかけてくる。

「どうした？」

「——つけられてる。」

「——。数は？」

「3人。・・・金属の擦れる音が少し聴こえるから、

武装してるっぽい。・・・やる？」

「やんねーよ。・・・うし、少し脅かすか。」



「・・・あれ？」

「・・・アンナ、どうした？」

3人で、”あの人”を尾行していたところ、
いつの間にか、姿が見当たらない。

「……見失っちゃった？」

「まさか。……けれども、いきなり姿が……。」

「よう。」

声をかけられた方を見ると、そこには、

私たちが尾行していた人物が立っていた。

なに……？肌が、なぜかひりつく……。

「わざわざ裏通りの人がいないところまで誘導してやったんだ。

……話を」

「——せいやあっ!!」

「……聞けつつってんだらうが。」

私が制止するよりも先に、レイが斬りかかる。

真つ二つになるかと思われ、血の気がさあ、と引いた瞬間、

がぎん、と音を立ててレイの剣が切り払われた。

「……………お前、今、何をした？」

「……………!!？」

——レイと、お兄さんの間に紅い影が割り込んだと思ったのは錯覚であり、それは一人の少女だった。

肩まで伸びた紅い髪をたなびかせ、装飾のついていない剣を

レイの首元に突きつけている。

「レイツ!!!」

「……………くっ……………この私が……………!？」

「……………なあ、聴いてんだよ……………答えるよクソアマ。」

「がっ?!」

自分の剣を容易く受け止められたことが信じられないといったレイの腹に膝蹴りを打ち込む紅髪の少女。

「レテ。ストップ。やりすぎだ。」

「……………ま、カネツグがそういうならいいけどさー。」

……………ああ、そのもう一人。その懐に伸ばしている手を早くしまいなよ。

……………こいつの首が飛んでいくのを見たいなら、話は別だけど。」

「・・・・・・・・・・」

奇襲しようと懐に手を伸ばしていたアンジェラに殺気を飛ばし、
威圧してくる。

——!!ひ、膝が・・・。

「・・・・・・・・・・あー、お嬢ちゃん、いいか?」

「は、はひっ。」

「いや、そんなビビんなくても・・・・・・・・。」

件の人物が目の前で、私の顔をちよつと心配そうにのぞき込んでいるのに気が付き、
尻もちをついてしまう。

「なんで、俺のことつけてたんだ?・・・・・・・・ぱつと見、育ちが良さそうだし、
物取りつてわけでもなさそうだが。」

「・・・・・・・・・・あ、あの!!!」

「うおっ。な、なんだ?」

がばり、と立ち上がり、頭を下げて叫ぶ。

「——モンスターの討伐の仕方、教えてください!!!」

「・・・・・・・・・・はん?」

それが、彼と私たちのなれそめだった。



「——むにゃあ。えへへへへ．．．カネツグさあん、だめですう．．．♡♡
あつ、そんなはげしつ♡ママになっちゃう♡ママになっちゃううう．．．♡♡」

「．．．あ、あれ??．．．夢??ああ、夢かあ．．．。」

火照る体を手でいじる。

胸をくりくりと手でもてあそぶ。

あそこはぐしよぐしよに濡れていて、

パジャマが湿り切っている。

「ん．．．♡♡．．．好きな夢を見られる枕、買ってよかったあ．．．♡♡」
結婚資金を貯めるくらいしか使い道のなかった金をはたいてよかった。

こうして毎日彼と夢の中でまぐわうことができる。

．．．隣のベッドで寝ている二人も同じ枕を使っているのは、ちょっといい気はしないが。

「さて、と．．．カネツグさん、おはようございます♡♡」

監視魔法の先では、ベッドで寝息を立てて眠り続けるカネツグさんの姿があった。

．．．．．見ているだけで、また．．．。

「ごそごそ、と服を脱ぎ捨てて、ベッドの上に寝転がりながら、

○○○に手を伸ばし、指でいじるとううあ、と声漏れてしまう。

「ううっ♡♡だめえっ♡♡カネツグさんっ♡♡カネツグさあんっ♡♡」

その日は、結局2桁、自分を慰めたのだった。

寓話く元駆け出しだったAランクパーティーたちの話 その2

「——ぶはあ、ぶはあ!!」

「うーし。こんなもんだろ。」

「うえええ……気持ち悪いよおお……。」

「アンナ……大丈夫?」

草原に寝っ転がるかしまし娘3人を見て、

そうつぶやく。

最初に出会ってから数日が経ち、

今、俺は彼女たちの面倒を見ていた。

どうしても体売るのはイヤだ、と泣きつかれ、

しかも街中でそんなことを言われて周りの人間に

注目されてしまったては、場をいさめるために首を縦に振るしかなかった。

なんツ一面倒な・・・と思ったのも杞憂で、

彼女たちは教えれば教えるほどその分吸収する逸材だった。

ゴボルト、スライム、ゴブリンの3連戦でよく最後まで

戦い抜けたものだと思わず感心したくらいだ。

「ゴボルトは鼻がいいから真つ先に刺激物を顔に投げつける。

スライムは動きがとろく、目の前にいる人間しか追いつけないから、

1人が囷になり、後ろから別のやつらが袋叩きにする。

ゴブリンはそこそこ素早いけど、リーチ、腕力はそこまでのため、

長い獲物か、遠距離の魔法で一方的に殴る。

ちやんと言われたとおりにできたな？」

「れ、練習の時より全然疲れるうう・・・」

「当たり前だろ。殺す、殺される戦いと、

死ぬ心配がない闘いじゃ、スタミナの減りが違う。」

「・・・。け、剣の腕に自信はあつたのだが・・・。」

「お前、レテを見て同じこと言えんの?？」

あの刃物キチガイ、一度手に取って剣を100%使いこなしやがるからな・・・。
冒険者の俺にその才能よこせと思う。

刀鍛冶だしいらねーだろ。

「・・・ぶ、分析の結果、まずは私たちはとにかく基礎錬してから

モンスター退治したほうがいいと思う・・・。」

「間違つてねーけど、お前ら金もつてねーだろ。そんな猶予あんのか？」

「うぐ。」

アンジェラが上目遣いでそう言ってくるが

ばつさりと切り捨てる。

そもそも、ファルバスのおっさんに金借りて、

それを待つてもらつてる状況なんだから、

んな案、寝言にしか聴こえねえ。

「モンスター退治すれば、体力もつく、金も手に入る、一石二鳥だろ？」

「・・・じゃあ、休憩したら次は薬草と毒草の見分け方を実施すすからな。」

「[[[[」



「——つてわけだ。」

「……。。。。。。。」

目の前で、無表情に俺の服を折り畳み、
家事をこなしているシャロにそうこぼす。

あの3人の面倒を見るために時間、エネルギーが取られちまっているが、
中途半端に見捨てたら恨まれるかもしれないので、止むに得ない状況だ。
俺の話を聴いているのか、いないのか、

よくわからない真顔でじーつと俺の顔を見てくるシャロに、
なんだよ、と返す。

「……ご主人様は、どうやら若い女が好きのようですね？」

「……は??？」

「——え?は?、と唐突に言われた言葉に頭が混乱し、

シャロの顔を見つめ返す。

心なしか、ほんの少しだが眉が釣りあがっている気がした。

「……なんだよ。自分の主人がロリコンか気にしてんのか？
んなわけねーだろ。」

「………違わないけど、違います。」

「??？」

なんだ……この……なんだ……。

背中に寒気が……。

意味がわからないが、

これ以上話していると、シャロがさらにキレそうな気がしたので、
無理やり話題を変えることにした。

「と、とりあえずもうしばらくあいつら3人の面倒見るからよ。」

実戦のためにフィールドで野宿もしてくっから、2, 3日は俺の面倒見なくって大丈夫だぞ。」

「………。」

びたり、とシャロの手が止まり、

ゆっくり、ぎぎぎぎ、と顔を振り向かせ、

俺の目を見つめてくる。

「……なぜ、出会ったばかりで信用できるかもわからない相手と、

一夜を共にする必要があるのですか？」

「いざというときに野宿も経験させて、夜の見張り番もやらせておかねーと、

今後困るだろ。」

「……カネツグ様。カネツグ様がそこまでする必要はありません。

……ここに帰ってくれば、おいしい食事も、清潔なベッドも、完璧なメイドもいます。

ほかには何が必要だというのでしょうか。」

「さーらつと自画自賛スナヤ。」

いや、仕事ぶりが完璧なのは数年来の付き合いでわかってっけどさ。

ぼりぼり、と頭をかき、そして不意に数年前、シャロが来る前に面倒を見ていた、人形のような緑髪の子供の顔が思い浮かんだ。

「これは、なんですか？」

「お前が今日から住む家だよ。……おい、なんで首を傾げる。」

「体つきは貧相ですが、まだ処女なので痛がる姿を楽しめると思っています。

よろしく願います。」

『ぶつとばすぞごらあああ!!』

——ふいに、胸の奥が痛んだ。

もうここにはいない、あのクソガキが座っていた椅子を見て、
思い出が心の内側から蘇ってくる。

「——じんさま。ご主人様？」

シヤロの声で、はつと我に返り、

首を振るって意識を取り戻す。

「……クソガキの面倒見るのは慣れてんだ。生憎な。

心配すんな。俺は大丈夫だ。」

「……………」

「……………あ?」

話は終わったので、明日に備えて寝ようと椅子から立ち上がろうとすると、
不意にシヤロが俺の服の袖をつまんできた。

「……………」

「……………」

かちこち、かちこち、と時計が針を刻む音が部屋に響く。

そして、シャロが口を開く。

「――牢屋に収監されたら、私がすぐに迎えに参りますから。」
「手を出すわけないだろうがあああ!!!」

色々と台無しだった。

寓話く元駆け出しだったAランクパーティーたちの話 その3

「おらあっ!!」

手に馴染む剣を斜め上から振り下ろし

水色の物体を切りつける。

一体を葬り去ることはできたが、

他にも何体も俺の周りににじりよってきており、

ジリ貧のところ、ついにその時がやってきた。

「——先生っ!!できませんでしたっ!!」

「——っしや!!ぶっぱなせえっ!!」

全力でその場から走り出し、顔からダイブする勢いで

緊急回避する。

次いで、先ほどまえ俺がいたところに

びしゅん、と電撃がほとばしり、

その場にまだのろのろとぐずっていたスライムどもを焼き焦がす。

「いっちょあがりい!!」——レイ!!アンジェラ!!そっちはどうだ?!!」

「——大丈夫だ!!問題……ないっ!!」

「——!!」

横では、レイがヘイト集めをしてスライムの動きを引きつけ、アンジェラが遠くから弓を振り絞り、一体ずつ狙撃し、確実に数を減らしていた。

「アンナ。二人の周りを警戒しつつ、増援が来ないか確認をしろ。

俺は打ち漏らしをカバーする。」

「は、はいっ!!」

——俺たちは今、野宿のために周囲のモンスターを

片っ端から刈っているところである。

こいつらは嬉しいことに、俺と違ってレベルがあがるため、すでにレベル5まで到達していた。

そのため、このアルバス平原よりもレベルが一個上の

サンドラ洞窟に行こうとも考えたのだが、リスクとリターンを計算し、

ここで野宿を経験させた方が今後のためになると判断し、こうしてアルバス平原に留まり、

モンスターの間引きをして安全確保をしている。

1時間以上の継続的戦闘のため、

俺も戦線に参加しつつ、

3人に何かあった時のカバーに入れるよう

立ち回っていた。

アンナは非力で鈍足だが、魔法の才能があったため、

基礎魔術、ボルトを覚え、遠距離から電撃を放つことができるようになった。

レイは自分で言うだけあり、剣の筋は悪くなく、

スライム、コボルト程度であれば数匹は倒せるレベルにまで成長した。

アンジェラは視野の広さと、その細身以上に蓄えられた筋力から、

弓をメインウェポンにサポートとして才能を開花させつつある。

(・・・上手く行きや、Cランクは行けるか?)

EからあがってDランクにあがる冒険者は70%。

DランクからCランクにあがる冒険者は50%。

つまり、新規冒険者が100人いるとしたら、

一人前のCランクになれるのは35人。35%である。

俺は万年Eランクのため、ランクを上げるとは諦めているが、

何とか食っていくことはできるため問題ない。

Dランクの平均レベルは10。

Cランクの平均レベルは20。

Bランクの平均レベルは30。

Aランクはそもそも絶対数が少なく、

上下で実力が隔絶しているため、平均というレベルが良くわからない。

とにかく、久しぶりに面白いやつらに出会ったことは間違いない。

(・・・結局、なんだかんだ俺が面倒見てきたやつらはCランクでいまだにとどまっているからな。)

こいつらなら、Cランクの壁も・・・。

お互いがお互いを庇いあい、

欠点を打ち消し、長所を伸ばし合っている理想的なパーティー。

しかし、一つ問題点があった。

「よし、そろそろ日が暮れてくるから、テントを今のうちにはって、

火を起こしておくぞ。」

「は、はあい・・・。」

「うー・・・。昨日よりはましだが、右腕が痛い・・・。」

「・・・レイはまだまし。私は弓を引いていて、背中が張っている感覚が取れない・・・。」

それを、俺がいるうちに何とかしてもらわんとな。



軽い保存食を取り、

火がぱちぱちと燃え盛る薪の前で、

俺は3人の前で今後数日の動きを改めて言う。

「今日から3日間。つまり明々後日まで。」

身を護りながら命がけでこの平原に泊るぞ。

「……質問は？」

「——はい。」

俺がそういうと、アンナがしゅば、と右手をあげた。

「夜の見張り番はどうするのですか？」

「それはタッグを組みかえてやっていく。」

俺とタッグを組む形だ。

最初の日が俺とレイ。

次がアンジエラ。そして最後がアンナだ。

「——他には？」

「——。」

レイが、す、と無言で左手をあげる。

「夜の間にもンスターが出てきた場合」

「すぐに全員たたき起こすで問題ないか？」

「ああ。それでいい。……いくら眠かろうが」

「永眠したくなかったらさっさと全員起こせ。」

「寝言はもンスターを倒した後で言え。」

「他は？」

「ん。」

「・・・背中が痛いんだつたら、無理して手をあげなくってもいいぞ。」

自分であげておいて、身もだえするアンジェラに嘆息し、

質問の続きを促す。

「——いざというときのため、なるべく、身を寄せ合つて

寝るべき？」

「!!？」

「あー。そうだな。ペアはすぐに相方を起こせるようにくつついていたほうがいいな。」

「・・・わ、わかった。」

「よし。ほかに質問が無いようだったら、今日はもう寝るぞ。」

「・・・アンナ、アンジェラ。ぐっすり寝とけ。」

俺がいるから問題ないだろうが、何かあつたら起こさせてもらうからな。」

「は、はい・・・。」

「了解。」

すぐに寢床に入ると、すうすう、と二つの寢息がすぐに聴こえてきた。

相当疲れていたのか、それとも、安心したのか。

なんにせよ、野宿の夜は長い。

徹底して間引いたとしても、

モンスターが出るときは出る。

そのため、常に最低限身構えながらも、

ある程度は休息を取らないといけない。

レテから買った、愛剣を肩にかけ、

ぱちぱちと燃える火をじつと見つめながら、

明日の予定を考えていると、ぼすん、とレイが隣に腰掛けてきた。

「……ん？」

「……………」

クール・ビューティーを体現したような、

切れ長の目。青い瞳に、碧い髪の色。

腰と肩の間まで伸びた髪を後ろでポニーテールにくくられており、

まるで女侍のような印象を受ける。

何かしゃべるのかと思ったが、

生憎ダンマリのようなだった。

そして、ぱちぱち、と木が焼ける音が何度も俺たちの耳に届き、

静寂を堪能していると、レイが話し始める。

「・・・なあ。」

「なんだ？」

「カネツグは、10年以上も冒険者をやっているんだらう？」

「ああ。」

木の棒で、薪の木の位置を微調整しながらレイの話に耳を傾ける。

「ずっと、ずっと一人なのか？」

「・・・。。。。。」

——かつては、一緒に組もうとした相手もいた。

でも、いろいろとあつて、それは叶わなくなった。

面倒を見ていた子供はいたが、あれは相方ではなく、

養う相手だった。

そう考えると、本当に10年も俺は独りで生きてきたことになる。

——まあ、家に帰れば口うるさいメイドがいるし、

どこから来るのかやつかみをかけてくるゴスロリ趣味の少女はいるが。

「・・・。。。」

俺の返事を聴くと、レイは俯きながらぼつぼつとこぼす。

「……私たちは幼馴染でな。……一緒にの村で過ごし、育ったんだ。」

「……口減らしか？」

「!!」

普通であれば村から出る理由もない。

ましてや、村から出てきた女だけのパーティーなど、ろくな事情があるわけない。

一番多いのが、不作による食糧不足。それが原因で起こる、村人の口減らしだ。

俺も同じ口でこの街にたどり着いたから今でも忘れることはない。

「ああ。……昔、父さんたちが使ったといわれる装備とかがあったから武器はなんとかあったんだ。……でも……」

「……なんで、借金したんだ？」

「……」

俺の言葉に目を伏せ、

口を閉ざす彼女。

こりや、しゃべる気はなさそうだ。

が、知ったこつちやない。

「おい。」

「え?・・・あ。」

しかめつ面をしているバカの頭を右手でむんずとつかみ、
わしわしと乱暴にかき乱す。

「わ、わわ!!な、ななな何をする!!!」

いきなり頭を触られて憤ったのか

立ち上がり、腰につけている剣に手を伸ばしながらうー、と威嚇してくる。

「んな顔すんな。・・・ほれ、騒ぐとあいつらが起きちまうぞ?」

「う・・・。」

俺がそう言つてアンナたちが寝ている方を指さすと、

ばつが悪そうにレイはまた座り込み、

しかしジト目でこちらを見ながら警戒してくる。

「・・・いきなり女の髪を触るとは、変態め。・・・これだから男は・・・。」

「・・・お前、男慣れしてないだろ。」

「にや、にや、にや、にやにをうっ?」

「しー!!うるせえっ!!モンスターが寄ってきちまうだろうがっ・・・!」

「あ・・・。」

やらかしたレイに冷ややかな目線を送ると、

顔を羞恥でほんのり赤らめながら、恨みのこもったジト目で俺をにらみつけてくる。

「・・・真面目なやつだと思つたのに・・・。変態・・・アホ・・・。うう・・・。」

「・・・まあ、なんだ。気にするな。」

「お前が言うなっ!!」

結局、俺とレイは喧嘩しながら、

互いの境遇について夜通し語り合つたのだった。



——
???

『ぎるてい?』

『本来であれば、今すぐにもあの男女を消し飛ばして、

“ご主人様を”私とご主人様だけ”の愛の巣にすぐに連れ帰りたいのですが、

『ここは我慢しましょう。』

『——ぶち殺すぞ。ところで、おまえ、最近キャラ変えた？トカゲ畜生。』

『——コウモリ風情が、あまり調子に乗るなよ？』

(・・・なんか、とんでもない化け物二人が、

あいつを監視しているように見えるんだけど・・・。

気のせいかな?)

夜の女王と、龍人と、劍聖に片足突っ込んでる刀鍛冶見習いが

カネツグたちからちよつと離れたところで見守っていたが、

気づくはずもなく、夜は更けていった。

とある一幕く彼がもし怪我をした場合くその2

「なんというか……。君はそういう趣味だったんだな。」

「……ちやうねん」

「？」

ベッドで安静にしている所、

ここの長である医者、ジャーグスが部屋に入ってきたかと思うと、

開口一番にそういった。

そういう趣味、っていうのはおそろく、

隣にいるメイドのシヤロのことだろう。

「大丈夫さ。僕は患者のプライベートには興味がないんでね。」

「担当主治医だつていうならこいつをどうにかしてくれませんかねえ……!!」

「……」

びきびき、と額に青筋が浮かぶのを自覚しながら、

ぐいぐいと服を脱がして着替えさせようとしてくるシヤロについて、

ジャーグスに抗議する。

「夫婦の喧嘩に水差す気はないんで。ごゆつくり〜」

「おいごらあああ!!」

「……ふ……ふうふ……」

ひらひらと手を振って、すぐに部屋から出ていく薄情医者。

あいつ、何しに来たんだ、と思っていると、

隣のシャロが動きを止めたことに気づき、声をかける。

なぜかフリーズしている。

「……?おい、シャロどうした?」

「……ふ……ふうふ……えへへ……」

「うわ……」

うわ……と思わず漏らしてしまった。

いつもは真顔で毒舌を吐くだけのメイドが、

なぜかにまにまと笑みを浮かべて、気持ちの悪い笑い方をしている。

「……貴方様。私は食事をとってまいります。」

「……お、おう……」

きり、いつもの顔に戻ったかと思うと、

すくりと俺の隣から立ち上がり、ぎこちなく両手を振って、
ドアに出ようとする。

——ごちん。

「……いつたあ……」

「

ぶふあ、と思わず嘖くと、シャロがぎろりと、とこちらを
にらみつけてきたので、慌てて口を両手で抑える。

「……。。。。。」

そのまま、ドアにぶつかってなどないですよ、と言わんばかりに、
外に出ていった。

顔は元に戻っていたが、顔が羞恥からかずっと紅くなっていた。

「……。。。。こわっ」

え？あいつなんであんな気持ち悪い笑い方したり、

ドアにぶつかつたりとかドジってんの??

シャロ、別人疑惑を抱きつつ、ぶるぶる震えていると、
こん、こんとドアがノックされる。

「……あいよー。」

はだけていた服を着なおし、

ドアをノックした主に返事をする、
がちやりと扉が開かれる。

「——カネツグさああああん!!!」

「ぐあああああつ!!!」

——ロケット弾のごとく、何者かの頭が俺の腹に着弾し、
絶叫の声をあげた。



「おう……おうっ……」

「あ、あのー……ご、ごめんなさいっ……!!」

腹を両手でさすりながら悶絶していると、

俺をこんな状態にした主犯がおろおろとしながら、

こちらを労わるように背中をさすってくる。

「……………エルさん。」

「……………むー」

「え」

名前を呼んだだけだというのに、

なぜか頬を膨らまし、気に入らないとむくれるエルさん。

え？名前呼ぶのもだめなの？やっぱり万年Eランクに人権は付与されてないの??と頭にいくつもの？マークを浮かべていると、彼女がぼそりつつぶやく。

「……………エル。」

「え？」

「さんづけしないですって言ってますよね？」

「え、いや、でも、エルさんはAランクで、俺はEランクですし、序列とかが……………」

「……アンナ。」

「

Aランクだが、俺が呼び捨てにしている奴らの名前を突然出されて、息が止まりかける。

「レイ、アンジェラ、パースリー、タルジュ、アンドラ、ゾーリン、ウェイブズ、

ローロー、マックス、ラドン、ミ・ミ、ユゴー、ヴェルナルド、フランク、ラング、アム。」

「

なんで俺のAランクの知り合いの名前知ってんの……???

「……ねえ、カネツグさん。」

「ハイ」

ぶるぶる、と震えていると、

エルさんがいつも、いや、いつもとはどこか違う爛漫とした笑みを浮かべながら、にこにこことこちらを見つめてきて、語り掛けてくる。

「親しさを表すためには、名前をどう呼ぶかって重要だと思うんです。」

「ハイ」

「・・・さん付けってどこかよそよそしいですよね？」

「デスネ」

「・・・。」

「」

「・・・。」

かつてないほどのプレッシャーを感じる・・・！

傷だらけのアリスを庇って、Dランクのウオルフと戦った時のように、

体がこわばり、汗が止まらず流れ出ていく。

覚悟を決めて、渴いて仕方がない口を動かして、

その名を呼ぶ。

「・・・え。」

「え？」

「・・・エル。」

「は」

「」

平穩は守られた。

主に俺の胃と引き換えに。

だが、これ以上の危機がこの後すぐにまちうけているなど、この時の俺には知る由もなかった。

寓話～元駆け出しだったAランクパーティーたちの話

その4

野宿を進めて2日。

そして、とうとう最後となった3日目の夜。

いつもと違い、年相応のあどけない寝顔で涎を垂らしながら寝ているアンジエラとレイの様子を確認し、

薪に木を追加でくべていた。

「……………」

隣には、俺と同じく今日の夜番だが、

疲れ切って眠りこけてしまっているアンナが

肩に寄りかかっていた。

本来であれば起こすべきであろうが、

安心そうな表情を浮かべて寝息を立てる

こいつの顔を見ると、毒気が抜かれる気がして

放っておくことにした。

結論から言うと、3人は悪くなく、

——しかし、Cランクの壁を超える見込みが薄いパーティーであった。

連携は悪くない。個々の能力も並みの冒険者としてなら

やっていけるレベルであろう。

だが、それだけである。

特筆すべきほどではないし、何よりも、

司令塔として命令を出す人間がいないのが痛い。

(……こんな小さな子供が、死ぬ、生きるの世界で

的確に命令を下せるほうがおかしいんだろぅがな。)

ふー、と息を大きく吐く。

少なくとも、こいつらを最低限面倒を見ると約束したからには、

指摘しなければいけない。

そしてもう一つ、問題があった。

借金についてである。

(……返さないといけないのが後100万リア。

ゴブリン28体分、スライム19体分、コボルト22体分……。

そして、その他もろもろの委託収入を足しても、

後20万リアは足りない。

返済期限はあと数日。

どう考えても間に合うとは思えない。

ファルバムのおっさんは、どんな手を使つても金を取りたてるだろう。

それは、あの3人が夜の街に立つことを意味する。

別に俺にとってデメリツトはない。失い物はない。

だというのに、俺はなぜか胸の奥にもやもやが渦巻き、

近くにあつたいしつころを握つて遠くにぶん投げた。

そんなことをしても気持ちちは晴れなかつた。

「……ん……」

俺が体を動かしたからか、アンナが目を開き、

ぼーっとした様子で辺りを見回し、

俺と目が合った。

「よう。」

「・・・・・・・・~~~~~!!」

自分が他人に寄りかかりながら寝ていたことに気がついたのか、
ばば、と後ろに飛びずさりわたわたと両手を振っておろつく。

「カカカカ、カネツグさん!!ご、ごめんなさい!!わ、

私、眠ってしまって・・・。」

「気にすんな。・・・起きちまったんならちようどいい。

武器を持って、俺の隣に來い。・・・夜はまだ続いているんだからな。」

「あう・・・・・・・・。」

気まずさからか、申し訳なさからか顔を赤らめながら

自身の持つ杖を持ち、俺の隣に腰掛けるアンナ。

長い金色の髪が耳に触れ、こそばゆい。

「正直、よく3日間持ったな。・・・初日の惨劇見てたら途中で逃げると思ってたわ。」

「あ、あははは・・・・・・・・。」

俺が言っていることがわかるのだろう、

渴いた笑いをうかべて、アンナは死んだような目で虚空を見つめている。

『——おい、レイ!!猪じゃねーんだから考えなしに突っ込むな!!』

アンジエラ!!味方が敵の近くにいるときは打つなつたつたろうが!!

別方向から来てんのを狙え!!アンナ!!腰抜かしてねーでさつきと魔力貯めとけ!!俺があいつらからモンスターを引き離すから、そしたらぶつ放せ!!!」

今考えても、最後まで面倒を見切った俺は我ながら偉いと思うわ・・・。

街に前つたら、酒場でフィーネちゃんのおっぱい見て癒されよう。

シヤロへのお土産を何にしようか考えていると、

隣で沈んだ様子のアンナがぼつぼつとこぼし始める。

「ごめんなさい……………私……………いつもこんなので……………」

えへ……………やっぱり、冒険者、向いていないんでしょうか……………」

「……………」

「レイは剣をうまく扱えて、勇気もある。アンジエラは察知能力に長けていて、

ずっと離れた場所から弓矢で射貫ける……………でも、私は人よりほんの少しの魔力

しかなくって……………」

アンナは自虐している。

恐れずにモンスター相手に立ち回るレイと、

ボーとしているように見えて、冷静に対処できているアンジエラ。

そんな二人と比較してしまっていることが俺にもわかった。

冒険者になったやつにありがちなことだ。

他のことではうまくやれなくても、冒険者にさえなれば・・・と。

だが、そんな甘いものではない。

誰にも可能性があるからって、

誰にもできるわけでもない。

俺と同じ時期に冒険者を始めたが、

諦めて故郷に帰ったやつも、ここで永住して店を開いて働いている奴も、

——しくじって、モンスターの餌になっちまった奴もいる。

正直言うと、これくらいでまいるなら、

冒険者をやめた方がいいとは思う。

しかし、こいつらにはほかに道がない。

戦闘技能を磨くしか、当面の収入を得る手段がない。

もつと子供であれば孤児院に相談して入れてもらい

大人になるまでに鍛えておくこともできた。

要するに、子供というには年を取りすぎ

大人というにはどこか幼すぎるのだ。

とりあえず、何か言っておいた方がいいだろうと考え、

口を開こうとしたその時だった。

「……………アン……………!?!」

——何か、良からぬ気配を感じ、

とつさに彼女を抱えて飛びのく。

それと同時に、俺たちが先ほどまで座っていたところに、カツ、とナイフが飛んできた。

「——へっへっへ。……………兄ちゃんたち、不用心だなあ。」

こんな街はずれで野宿なんざしていたら、……………怖い怖いモンスターにやられちまうぜえ?」

松明をもった男たち、それも身なりからしてよろしくなさそうな風体の人間が10人以上、俺たちの前に現れた。

「あ……………あ……………」

アンナも状況を理解したのだろう。

恐怖からか顔が青ざめ、ぶるぶると小刻みに体が震えている。

すうう、と大きく息を吸い込み、
そして大声を出して叫ぶ。

「……レイ!!! アンジェラ!!!
敵だ!!! 今すぐ起きろ!!!」

声が届いたのか、二人はがばりと瞬時に飛び上がり、
獲物をもって、俺とアンナの近くに寄ってくる。

「……盗賊……か……」

「……」

二人とも武器を構えながら、
アンナを庇うように立っているが、
見ればわかる。武器を持つ手が震えている。

(……やべえな。)

人間同士の殺し合いに慣れているはずもない
小娘3人に、万年Eランクが1人。

盗賊10人以上の相手はどう考えても分が悪い。

左鞘に帯刀しているレテから、
もらった剣を右手で引き抜き、
構える。

「はっはっはあ!!何?俺たちとやるの?」

「こつちは10人以上いるんだよ?」

「そうそう。大人しくした——」

かぺ、という何かがつぶれる音とともに、
どざりと地面に人間だったものが倒れた。

隣にいたアンナたちが信じられないものを見るような目で、
ナイフを振りかぶって投げた俺の顔を見つめている。

そして、盗賊たちも同じようにアホ面をさらして、
呆気に取られていた。

「アホか。悠長におしゃべりなんぞして。」

ナイフ当て放題じゃねーか。」

俺の言葉が癪に障ったのか、

リーダーらしき男が右手に剣を構えながら、

叫ぶ。

「……野郎!!」

「ぶつ殺す!!」

「女は身ぐるみはいでから俺たちの奴隷にしてやる!!」

「やってみろや!!!ゴミどもがああああ!!!」

かくして、長い夜が始まった。

寓話～元駆け出しだったAランクパーティーたちの話

その5

「おらあつ!!」

「ぐげつ!!」

ナイフで仕留めた矢先、次の盗賊に自ら斬りかかり、一閃する。

ずる、と胴体の上から滑り落ちて地面へと倒れると、血の川を作りながら、あの世にまた一人旅立つ。

「わ、わわわわわわ・・!?」

「レイ!!アンナをカバー!!アンジェラ!!火を消せ!!」

「そらあつ!!」

「了解!」

慌てて魔法を唱えようとするも、人間相手に躊躇しているのか、ぶるぶると震えているアンナをレイにカバーするよう指示を出し、次いでアンジェラに火を消させる。

「うおっ!? 見えねえ!」

「畜生!! どこだ!」

「。。」

「ぐぎやっ!」

薪という光源を失い、声を荒げて盗賊達が俺達を探すも、同志討ちを避けてか、動きが鈍る。

その隙に、すぐ近くにおいて盗賊だとわかる相手を右手に握った剣で首を掻っ切り、絶命させる。

「——アンジエラ!! レイ!! アンナを連れて撤収!! 急げよ!!」

「・・・はい!!」

「・・・!!」

「え? え?!」

わっせ、わっせとアンナを運ぶレイとアンジエラ。

その人影が俺達であると気付いた奴らが追ってくるのを振り返っては剣を振って牽制し、すぐさままた前を向いて走り続ける。

「カ、カネツグさん!!」

「——俺にかまうな!!行け!!」

「は、はいっ!!」

アンナが俺を心配してか、立ち止まろうとするのを一喝し、また盗賊の方に体の向きを変え、剣を振るって盗賊の足を止める。

「——」
ピキイ、と脚の健が痛んだのか、嫌な感覚が下半身からして、すぐさままた走ろうとしても足がもつれかかって上手く動かせない。

「——!!」

「うおっと!?!」

走るのを諦め、剣を構えて横なぎに振り払う。

その動きのおかげか、こちらに向かってきていた盗賊達の動きを止めることに成功し、アンナ達は無事に離脱できた。

「・・・はっはっは。英雄気取りか？おい・・・。」

先ほどまでとは違い、統率された動きで俺をぐるりと取り囲むように四方に配置し、こちらを武器で軽く牽制しながらじりじりと近づいてくる。

ただの盗賊じゃない？

軍属に近い集団化された人間の動き・・・。

「——傭兵か。」

俺の言葉に、ぴたりと動きを止め、隙ができた。

一番近くに居た人間の剣にこちらの剣を押し当てて、つばぜり合いながら横走りする。

「ぬうんっ!!」

「くっ!!」

あちらの方がステータスが上なのか、切り払われると同時に大きく弾き飛ばされる。

握っていた剣を手放すことは回避できたが、一撃が重い。

武器の扱いでは向こうの方が上だと認めざるを得ない。

「——つち。しぶてえな。．．．割に合わねえ。たまたま襲った奴がこんな厄介な奴だったとは。．．．盗賊廃業も考えちまうよ。」

「．．．一つ聞かせろ。」

「．．．あ？」

俺の一つ、という言葉に動きを止め、リーダーらしき人物が疑問を浮かべながらこちらの次の言葉を待つ。

時間だ．．．時間を稼がないといけない。

そのために、相手が応えたがる質問をしろ。

傭兵．．．。盗賊．．．。

北のリルド国家．．．。傭兵国家から身崩れ．．．。

「．．．なんで、傭兵様が盗賊なんかに身をやつしている？」

「．．．わからねえだろうな。俺もこう見えてレベル10は行っているんだがよ。」

思っていた以上に高いレベルだったことに驚愕を内心で浮かべつつ、次の言葉を待つ。

—

一つ情報は引き出せた。頭を狙えば総崩れさせることもできると考えていたが、ここまで実力差があると難しい。

「……戦場で、運悪く出会っちゃったのさ。……最強の傭兵に。」

「……リルド最強の傭兵……。……」戦鬪王”か……。」

「ああ……。今から数年前だが……。こっちの武器は通らねえわ、素手で人間が真つ二つにされるわ、地形を利用して分断させられ、各個撃破されるわ……。悪夢だったぜ……。」

その名前は俺も知っていた。

”紅蓮の悪魔”が戦場では特に名前が知られているが、成り上がりで後ろ盾が何も無い状態からその身一つで最強の傭兵と言われるまで至った伝説の男。リーダー帝国に君臨する”十王”に匹敵するとも言われている怪物。

「独りで都市を落とした”パペットマスター”、”酒呑童子”、”剣王”ら”十王”と同格と言え、その底知れなさがすぐさまわかる。」

「逃げるしかなかった。こいつらを連れてな。……負けて、逃げた傭兵を雇う奴なんか

居やしねえ。．．．だから、こうして盗賊につてな．．。」

「．．．．．。」

こいつも俺と同じようなもんか．．．。

理不尽な目に遭い、心が折れて、落ちぶれた。

俺だって、そんな怪物に襲われたら死ぬ自信がある。

まずは命乞いするために恥も外聞もなく土下座するだろう。

じり、じりと俺を囲む盗賊達がすり足で近寄ってきている。

「——さて、攻撃の届く位置まで配置出来た。．．わりいな。俺達も生きるためなん

だ。．．．死んでくれや。」

「．．．．．。」

俺一人ではやはり無理だ。

数が多すぎる。この状況、俺がどうにかできる問題じゃない。

だから

「終わり．．．。」

「——ああ。終わりだな。」

リーダーらしき男の言葉にかぶせて言う。

そろそろ頃合いだろう。街に着いて．．．

戻ってくるはずだ。

「ふせてくださいっ!!」

後ろから聴こえてきた言葉に、とつさに身を伏せる。

誰が、何が、どうなつてと困惑する表情を浮かべ、身を強這らせる奴らを尻目に、それは放たれる。

「」
”龍聖劍!!!”
「」

——夜の平野に、光り輝く馬鹿デカイ剣を構えたエマさんの姿が見えた。

寓話～元駆け出しだったAランクパーティーたちの話 その6

事の顛末を話すと、エマさんによつて

盗賊たちは壊滅させられ、生きている者、

死んでいる者含めてギルドまで連行された。

3人娘を逃がしたい理由は俺よりもステータスが上であり、

逃げ足も速いので、助けを呼びに行かせるためだった。

結果的に、あの町で最高の戦力が救援に駆け付けてくれ、

俺たちは命からがら助かった。

大剣に光を集め、衝撃波を放つその姿は、

さすがのAランク冒険者というべきか。

どのようなモンスターであろうとも、

当たればただでは済まないことをうかがわせる

爪跡が、大地に刻まれていた。

・ ・ ・ まあ、威力が高すぎて、地面にクレーターが出来てしまった、つてだけだが。

念のため治療と、事情聴取のため、俺たちもギルドまで同行し、そこで治療と、休息を取らせてもらってから、一通りの事情を洗いざらい話した。

運悪くというか、戦場から逃げ出した傭兵崩れの盗賊団に出会ってしまったのは仕方がない、とのことだったのでお咎めもなく、むしろ同情を買えたのはまじだった。俺も特にひどいけがはなく、そして、あの3人娘はというと・ ・ ・ 。

「——師匠っ!!」

「ぐほおああっ!!」

あのアホ3人の顔を思い浮かべながら、これまでの出来事を回想していると、ギルドの掲示板前で立っていた俺の後ろから何か声があげながら突進してきた。突然の攻撃に対して踏ん張り、どうにか体不倒れないように後ろを振り向くと、突撃してきた馬鹿一人と、そんなこいつの後ろに立つもう二人。

あの3人娘達だ。

「師匠!!師匠!!どうしたんですか!?一緒にクエスト受けに行きませんか!!」

「ご飯食べに行くだけでもいいですよ!!」

「痛えよアホ!!」

「あうっ」

いきなり背中からタツクルかましてきやがったアンナの頭にげんこつを食らわせ、

そして飼い主である二人に対しても恨み節を炸裂させる。

「レイっ!!アンジエラっ!!いい加減こいつの手綱握つとけっつていつも言っただろうが

あ!!」

「いや・・・目を離すとすぐさまいなくなっているもので・・・。」

「・・・専門外・・・。」

「っーかお前はことある事にひつつこうとすんなや!!」

「うううう・・・あく・・・師匠の匂いいい・・・。」

若干ネコ目になりながら、俺の腹に自分のつむじをおしつけ、

すりすりと体をこすりつけてくるアンナの頭を押さえながら、叫ぶも、

効果はなく、しがみついてくる。

当然、そんな姿をギルドで晒せば、周りからも

『カネツグー!!誰だそのかわいいこちゃんたちー!!』

『俺らにも紹介しろよー!!』

『ついに本命が決まったのかー!?なんてな!!ぎやはははは!!』

『……』

『……ん?な、なんだこの美少女ちゃんたち……?』

『目がこわっ』

『ぎやあああああつ!!指はらめえええ!!』

『なんか恐ろしいほどかわいい美少女ちゃんたちが』

カネツグを冷かしていた奴らに関節技を極めてんぞ!!』

ここはうるさいし、これ以上いてもからかわれるだけなので、さっさと

ギルドから出ることにした。

おまけ+3という余計なやつらもいるが、まあいい。

「……おう。そういうえばこの近くに値段もそこそこで、

上手い料理屋が最近オープンしたんだが、行くか?」

「!!行きます!!行きます!!」

「私も。」

「……行く。」

「うし。飯食つたらクエスト行くぞ。」

・アンナ!! てめえはいい加減離れろや!!」

——こんな日々が、3人娘が出世して、別の街に移るまで
続くことになった。

・色々と手を焼かされたこともあったが、
それを差し引いても、退屈はしなかった。

シヤロはこの半年間、ずっと不機嫌だったが、

3人娘がいなくなつてから、いつも通りの調子になった。

おっさんが若い女を侍らせているようにも見えるし、

不潔だと思うのも無理はないだろうが、わかりやすいやつだ。



——時は過ぎ、某国、某所にて

「なあ、アンナ。本当にここであつていいのか？」

よどんだ空気を醸し出す、とある廃村の一角にて。

黒髪の長髪をたなびかせ、腰に名刀を差し

伸びた身長と、成長した体つきを強調するような銀色のプレートメイルに身を包む

レイは、とまりで白の水晶が先っぽについている杖で探知魔法を使用しながら辺りを伺うアンナに問いかける。

「この辺のハズ……。」 鬼 …… 一体どこにいるの……?」

同じく、辺りを伺いながら、弓を構えつつゆくりと廃村を進むアンジェラ。

猫背だった立ち姿は成りを潜め、どこか自信を感じさせるまっすぐ伸びた背筋のまま、歩みゆく。

「うん。……作物や、村を荒らす”鬼”……。目撃情報が正しければ、ね……。」

アルバーツ連邦にしかないはずの”鬼”がどうしてこんなところにいるのかは不明だったが、それでも、Bランク冒険者たちが束になってようやく勝てるかというモンスターだ。

Aランクパーティーの彼女らも、自然と体をこわばらせ、

奥に、奥にと進んでいく。

「……ん?なんだ、この匂い……?」

「……これは……お酒……?」

廃村から少し離れたところにあるひとときわ大きな掘立小屋。

そこから鼻をつくようにあたりに広がるアルコールの匂いに眉をひそめながら、

3人は顔を見合わせる。

「……ここ、もう人はいないはずなんだよな？」

「うん。……過去には“十王”が村を荒らしていたモンスターを討伐して、

平和になった時期もあつたみたいだけど、今は……。」

「……あそこ……怪しい……。」

なんで、酒の匂いが……？と疑問を浮かべながら、

3人はそのおの元である掘立小屋までゆつくりと近づいてく。

「——うii」

のそり、とそれは突然現れた。

気楽に、気軽に、小屋の戸を開け、ずしん、ずしんとその2M、いや、それ以上は優
にいている巨体でふらふらとした足取りで歩きながら歩を進める。

頭には角が2本生えており、腰には飲み物が入っているであろうひょうたんの形をし
た水筒がかけられている。

黒っぽい紫色の甚兵衛を身にまとい、足には鉄球が嵌められているが、

”鬼”の足取りを重くするにはそれでも、不十分であった。

「……ああ？なんだ、嬢ちゃんたちい……？」

酒の追加かあ……？」

「……!?!」

「……レイ!!アンジェラ!!」

いきなりの事態に硬直した二人に対して、

リーダーであるアンナは即座に名前を呼び、

意識を戻させる。

アンジェラは”鬼”の顔めがけて弓矢を放ち、

レイはその胴体にめがけて剣を放つ。

「———今、何かしたかあ？」

「……!?!」

「……!?!」

だが、矢は”鬼”が口で啜えて防ぎ、

剣はそもそも甚兵衛さえ切ることができず、

カキイ、と金属音を奏でるだけであった。

すぐさま、二人は正体不明の”鬼”から距離を取り、アンナが魔力を貯め始める。

「……俺が”誰”だか知ってて喧嘩売ってんだよなあ？
おめえらあ……。」

それまで、酔っていて足取りがふらついていたはずの”鬼”からみるみる酒気が消えていき、
ぎらり、と眼光は鋭さを増し、3人をにらみつける。

「レイ!!アンジェラ!!時間を稼いで!!」

私が一撃で決める!!」

「了解!!」

「……先生の言いつけ通り、無理せず、さぼーと……。」

「……ぐわあつはつはつはあ!!!マジかあ!!!」

逃げねえのかあ!!肝が据わってんなあ!!嬢ちゃんたちい!!

・・・いいだろお。暇つぶしに、遊んでやらあ!!!」

今日も、彼女たちは“冒険”をする。

時には、命を落としてしまいそうになることもあるが、持ち前の悪運の強さと、師匠から教わった、慎重さ、生きぎたなさを胸に。

——意中の男を手に入れるために、力を蓄え続ける彼女たちの戦いは、まだまだ続く。

く酔っぱらったところをほいほい食われた場合（）　その1　フィーネの場合

例えば想像してみてもほしい。こうしたことを。

年齢20をとうに超えている一般的な男がいる。

その男は特に趣味も持っておらず、仕事に打ち込むくらいしかやることがない。

人間関係は悪くはない。個人事業主的働き方なので、自己責任ですべてやらないといけないのが厳しいところであるが、自分ですべてを管理できるという魅力もある。

が

「・・・・・・・・・・はあ。」

どん、と手に持っていたジョッキをカウンターのテーブルに置くと、

グラスを拭いていたマスターが、眉を顰め、こちらをいぶかしみながら

視線を飛ばしてくる。

指でジョッキのグラスをはじくと、きいんと小高い音が鳴った。

鈴に似た音で涼しさを感じる。

「・・・・・・・・・・はああ。」

「……どうしたんですかあ？」

「……うん？」

背中からいつもよく聞く声に呼びかけられたので振り向けば

甘いにおいが鼻をくすぐり、桃色の束ねられた髪が跳ねるのが見えた。

そして、何より目立つのが給仕服に収まりきらない、きつそうで、

今にも弾けそうなその胸だ。メロンか、スイカか。

いずれにせよ重厚感が半端ない。

「……フイーネちゃんか。……はあ。」

「？お仕事で何かあったんですか？」

ピコピコ、とケモノ耳をぴくつかせながらそう首を傾げてくる。

相変わらず、愛くるしい。ああ、こんな娘と、ゴニョゴニョできたらなあ、

と思えるほどの気立ての良い美少女である。

もう何年もの付き合いになるが、彼女が悪く言われているところを見たことがない。

「いや、仕事は上手く行ったんだけど……。」

「？」

「依頼主が……な……。」

『ありがとうございます。』

これでジョー様を……ふふふふ……』

『あ……はい……』

取り扱いは十分気をつけなければならない、ドラゴマンドラと呼ばれる毒をもつ薬草の原料となる草を集めてほしい、という依頼を達成し、依頼主に手渡ししたとき、見ているだけでじんわりと汗が浮かぶような口を文字通り三日月にゆがめて怪しく笑う紫髪の少女の事だ。

あれを使って何をするかわからないが、どうやら想い人がいるらしい。

あんな子供さえ青春をしているというのに、

俺の周りにはむさい男ばかりだし、何より俺になびきそうな女性と縁がない。

そう思うと不意に胸が痛み、こうして酒を呑みながら管を巻いている所である。

しかし、酒をいくら飲んだところで胸のつかえがとれるわけもなく、

ただ頭がアルコールによって毒され、痛んでいくだけだった。

フィーネちゃんの方をちらりと見ると、？と頭に疑問符が浮かんでそんな表情のまま、笑みを浮かべ、こちらをじつと見つめてくる。

耐え切れず、目線をそらすと意識しているようで余計気恥ずかしくなり、それを隠すようにジョッキの中の酒を更に煽る。

「飲みすぎは良くないですよお？」

「いいんだよ。明日は休みの予定だし……。ひつく。」

平気なことをアピールするために立ち上がり、

両手を広げてはっはっは、と笑い飛ばす。

だが、実際のところは視界が揺れ始め、頭の中ではがんと

警報が鳴り響いてやまない状況だ。

重心が安定せず、バランスを崩して倒れそうになるも、

横から彼女に支えられる。

「あー……。」

「しょうがないですねえ。……マスター。彼を休ませてきますね？」

「……。」

何やら彼女が誰かと話しているようだが、頭が上手く働かず、

眠気が急激に襲ってくる。

どうやら肩を支えられたまま、どこかに、移動しているみたい……だ……。

「……おやすみなさい。次に起きた時はステキなことになっていきますからね……？」

「」

意識が完全に途切れる前に、彼女がそんな風にいったような気がした。

「はあっ♡♡はあっ♡♡」

ベッドに横たわる彼の衣服をすべて剥ぎ取り、自分も同じく裸となる。ツインテールにほどいていた髪も開放し、ぐっすりと眠っている彼のおでこに人差し指を添え、呪文を唱える。

『』

「.....zzzz」

浅い呼吸から深い呼吸に切り替わり、完全に睡魔へといざなわれたことを確認し、そして彼の唇に自身の唇を重ね合わせる。

「ふっ♡♡むふうあっ♡♡ふっ♡♡ふっ♡♡ふっ♡♡ふっ♡♡」

「.....ん.....」

両手で頬をがっちり抑え、彼の口の中に舌を侵入させていく。

歯はもとより、歯ぐきから奥のほうまでじっくりと味わい、

丁寧に分を刻み込んでいく。

暗く、明かりもない部屋の中、自分と彼だけがいる空間で、

男女の愛を紡いでいく。

一体どれくらいの間そうしたのかわからないほど、

彼とキスをし、ゆつくりと顔を離すと唾液の意図が自分と彼の間伸び、銀色の橋を作り上げた。

これは立派な犯罪だ。自覚している。

度数が高い酒をマスターに頼んで彼にふるまってもらい、

酔ったところをあらかじめ用意していた別室に連れていき、

そこで睡眠魔法で絶対に起きないようにし、それからことに及ぶ。

その機会がなければそうはしなかっただろう。

しかし、偶々そのチャンスが来て、欲しいものが手に入るのに

手を伸ばさない馬鹿はいない。

「・・・んっ♡」

彼の右手を手に取り、自身の胸に触れさせる。

自分するのはまた違う感覚に体がしびれ、思わず声が漏れる。

好きな人に触られるというのは、こんな感覚なのか・・・。

これ以上のことをすると、自分はどんなふうに壊れてしまうのだろうか。

自分を抑えていられるだろうか。

左手で自分の秘部に触れると、くちゆり、と音が鳴った。

「・・・愛してます♡♡カネツグさん♡♡

私、どうしても貴方のことが欲しいんです♡♡

・・・だから、レイプしますね？♡♡」

そう高らかに宣言し、再び彼の方に身を寄せた。